旭町埋蔵文化財発掘調査報告書 3

山ノ内古墳群

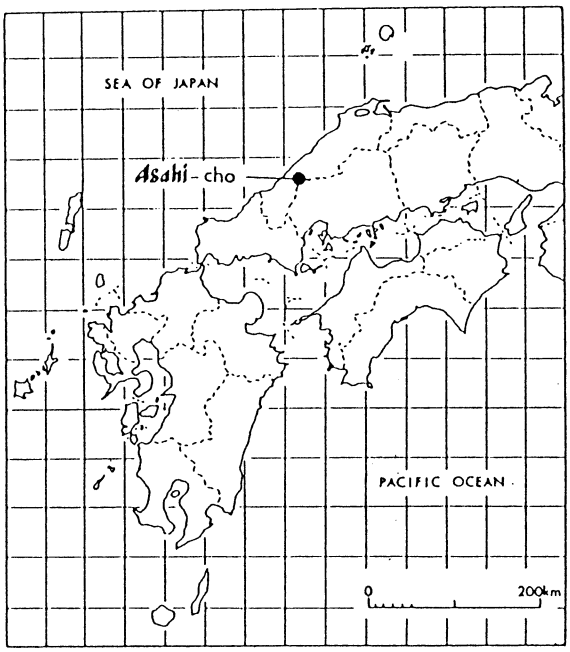
1994年 3 月

旭町教育委員会

県営農地開発事業（梨園造成）に伴う

山ノ内古墳群発掘調査報告書

（12・13・29・30・31・32・33）号墳



Location of Asahi-cho

平成６年３月

島根県旭町教育委員会

山ノ内古墳群に広がる雲海

山ノ内12号墳主体部(上から)

序

農林業を基幹とする本町の産業にあって、21世紀を展望した新しい旭農業づくりのため、木田地区と山ノ内地区にまたがる山林一帯を開発し、大規模梨園の造成を進めております。

旭町教育委員会では、島根県浜田農林事務所からの委託を受け、平成４年度において、造成変更により計画された開発予定地内の発掘調査を行ってまいりました。

その結果、５世紀末～６世紀初頭に築造されたものと推定される古墳をはじめ計８基の古墳が新たに発見され、当地域の歴史についての貴重な資料を得ることができました。

本書は、発掘調査の記録をまとめたものでありますが、広く各方面においてご活用いただければ幸いであります。

発掘調査にあたり、ご指導をいただいた県教育委員会文化課をはじめ、御協力をいただいた多くの皆さんに心から感謝申し上げます。

平成６年３月

島根県旭町教育委員会
教育長　中山　猛

例　　言

1．本書は、島根県那賀郡旭町大字木田1635番地外に所在する山ノ内古墳群（12•13•29•30•31•32•33号墳）の発掘調査報告書である。

2．本調査は、島根県浜田農林事務所の委託を受けて、旭町教育委員会が実施した。

3．発掘調査は今田修二が担当し、島根県文化課の指導を得ながら、1992年８月27日から1993年３月31日まで実施した。

4．調査組織は次の通りである。

調査主体	島根県旭町教育委員会
事務局	中山　猛・芳川栄佑・湯井郁夫・阿瀬川勇二・高田博子
調査員	今田修二（旭町教育委員会主任主事）
調査指導	島根大学教授　田中義昭・島根県教育委員会文化課　川原和人 同文化財保護主事　内田律夫・同主事　熱田貴保
調査補助	大賀千代香
調査参加者	藤本利春・平石安雄・高田静雄・福田浅人・佐伯一郎 寺沢宥秀・松井喜久江・平石フサエ・柿木結子・藤本松枝

5．発掘調査に際しては、地元の方々をはじめ島根県浜田農林事務所、旭町産業課から終始多大な御協力をいただいた。また現地調査指導にあたっては田中義昭氏（島根大学教授）から御教示いただいた。記して感謝の意を表したい。

6．出土遺物の整理は旭町教育委員会で行い、調査に関する資料（写真・実測図等）は同所で保管している。

7．本書の執筆は、調査員・調査補助員・調査協力者・事務局が行い、編集は今田修二が行った。

目　次

序　文
例　言
第Ⅰ章　調査に至る経緯 …… 1
第Ⅱ章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 2
第Ⅲ章　山ノ内古墳群の構成 …… 5
第Ⅳ章　山ノ内古墳群 ……13
1．山ノ内古墳群の概要 ……13
第1節　12号墳の調査 ……13
1．調査前の状況 ……13
2．墳　丘 ……14
3．周　溝 ……15
a 周溝内出土の遺物 ……16
4．埋葬施設 ……17
a 第1主体部 ……18
b 副葬品 ……21
c 第2主体部 ……21
第2節　13号墳の調査 ……22
1．調査前の状況 ……22
2．墳　丘 ……23
第3節　29号墳の調査 ……24
1．調査前の状況 ……24
2．墳　丘 ……24
3．周　溝 ……26
4．埋葬施設 ……26
a 出土遺物 ……27
第4節　30号墳の調査 ……28
1．調査前の状況 ……28
2．墳　丘 ……29
3．周　溝 ……30

4．埋葬施設 ……31
第5節　31号墳の調査 ……32
1．調査前の状況 ……32
2．墳　丘 ……33
3．周　溝 ……34
4．埋葬施設 ……35
第6節　32号墳の調査 ……36
1．調査前の状況 ……36
2．墳　丘 ……36
3．周　溝 ……37
4．埋葬施設 ……37
第7節　33号墳の調査 ……41
1．調査前の状況 ……41
2．墳　丘 ……42
3．周　溝 ……45
4．埋葬施設 ……45
第8節　その他の遺構 ……46
1．1号土壙 ……46
第Ⅴ章　周辺部の調査 ……49
1．34号墳の調査 ……49
2．35号墳の調査 ……51
3．36号墳の調査 ……51
第Ⅵ章　まとめ ……55

挿　図　目　次

第 1 図　山ノ内古墳群の位置と周辺の遺跡分布図 …… 3 ～ 4
第 2 図　山ノ内古墳群分布図 …… 7 ～ 8
第 3 図　山ノ内古墳群調査前地形図 …… 9 ～10
第 4 図　山ノ内古墳群調査区配置図 ……11～12
第 5 図　12号墳調査前の墳丘 ……13
第 6 図　12号墳調査後の墳丘 ……14
第 7 図　12号墳墳丘縦・横断土層実測図 ……15
第 8 図　12号墳周溝内遺物分布図 ……16
第 9 図　12号墳周溝内出土土器実測図 ……16
第 10 図　12号墳主体部実測図 ……17
第 11 図　12号墳第 1 主体実測図 ……18
第 12 図　12号墳第 1 主体遺物出土状況実測図 ……19～20
第 13 図　12号墳第 1 主体出土鉄器（刀子）実測図 ……21
第 14 図　12号墳第 2 主体実測図 ……21
第 15 図　13号墳調査前の墳丘 ……22
第 16 図　13号墳調査後の墳丘 ……23
第 17 図　13号墳墳丘縦・横断土層実測図 ……23
第 18 図　29号墳調査前の墳丘 ……24
第 19 図　29号墳調査後の墳丘 ……25
第 20 図　29号墳墳丘縦・横断土層実測図 ……26
第 21 図　29号墳主体部実測図 ……27
第 22 図　29号墳出土土器実測図 ……27
第 23 図　30号墳調査前の墳丘 ……28
第 24 図　30号墳調査後の墳丘 ……29
第 25 図　30号墳墳丘縦・横断土層実測図 ……30
第 26 図　30号墳主体部実測図 ……31
第 27 図　31号墳調査前の墳丘 ……32
第 28 図　31号墳調査後の墳丘 ……33
第 29 図　31号墳墳丘縦・横断土層実測図 ……34

第 30 図　31号墳主体部実測図 ……35
第 31 図　32号墳調査前の墳丘 ……36
第 32 図　32号墳調査後の墳丘 ……37
第 33 図　32号墳墳丘縦・横断土層実測図 ……38
第 34 図　32号墳主体部実測図 ……39～40
第 35 図　33号墳調査前の墳丘 ……41
第 36 図　33号墳調査後の墳丘 ……42
第 37 図　33号墳墳丘横断土層実測図 ……43～44
第 38 図　33号墳主体部実測図 ……45
第 39 図　１号土壙 ……46
第 40 図　山ノ内古墳群調査後地形図 ……47～48
第 41 図　山ノ内古墳群試掘調査箇所土層断面実測図 ……52
第 42 図　山ノ内古墳群試掘調査出土遺物実測図 ……53～54

図　版　目　次

図版１　山ノ内古墳群の周辺地形の鳥瞰（空撮）
図版２－１　調査地遠景（南から）
　　－２　調査地近景（東から）
図版３　調査地近景（南から）
図版４－１　12号墳調査前の状況（東から）
　　－２　同　表土除去後の状況（東から）
図版５－１　12号墳東側周溝プラン検出状況（東から）
　　－２　同　完掘状況（東から）
図版６－１　12号墳墳丘東側土層（北から）
　　－２　東側周溝土層（北から）
図版７－１　12号墳西側周溝プラン検出状況（南から）
　　－２　同　周溝内遺物出土状況（南から）
図版８－１　12号墳墳丘北側土層（西から）
　　－２　同　西側土層（北から）

図版９－１　12号墳主体部検出作業状況
　　－２　同　検出状況（東から）
図版10－１　12号墳第２主体（東から）
　　－２　同　石材抜き取り後（東から）
図版11－１　12号墳第１主体検出状況（南から）
　　－２　同　（北から）
図版12－１　12号墳第１主体（上から）
　　－２　同　蓋石除去状況（北から）
図版13－１　12号墳第１主体（南から）
　　－２　同　（北から）
図版14－１　床面（礫床）検出状況（上から）
　　－２　副葬品（刀子）出土状況
図版15－１　第１主体石材抜き取り後（西から）
　　－２　盗掘跡検出状況（上から）
図版16－１　13号墳調査前の状況（東から）
　　－２　同　調査後の状況（東から）
図版17－１　13号墳北側土層（西から）
　　－２　同　西側土層（北から）
図版18－１　29号墳表土除去後の状況（西から）
　　－２　同　北側土層（西から）
図版19－１　29号墳周溝プラン検出状況（南から）
　　－２　同　完掘状況（西から）
図版20－１　29号墳遺物出土状況（西から）
　　－２　同　主体部プラン検出状況（北から）
図版21－１　30号墳調査前の状況（西から）
　　－２　同　主体部検出状況（北から）
図版22－１　30号墳主体部検出状況（南から）
　　－２　同　北側土層（西から）
図版23－１　30号墳主体部（西から）
　　－２　同　石材抜き取り後（南から）
図版24－１　31号墳検出状況（西から）

－2　同　（南から）
図版25－1　31号墳南側土層（西から）
－2　同　周溝土層（北から）
図版26－1　31号墳主体部（西から）
－2　同　石材抜き取り後（東から）
図版27－1　32号墳調査前の状況（西から）
－2　同　主体部検出状況（西から）
図版28－1　32号墳北側土層（西から）
－2　同　周溝土層（北から）
図版29－1　32号墳主体部（東から）
－2　同　（北から）
図版30－1　32号墳主体部（東から）
－2　同　（南から）
図版31－1　32号墳主体部完掘状況（東から）
－2　同　石材抜き取り後（東から）
図版32－1　33号墳主体部検出状況（南から）
－2　同　北側土層（東から）
図版33－1　33号墳主体部検出状況（南から）
－2　12号墳と33号墳の位置（東から）
図版34－1　33号墳主体部（上から）
－2　同　（西から）
図版35－1　33号墳蓋石除去状況（南から）
－2　同　主体部断面（西から）
図版36－1　33号墳主体部（西から）
－2　同　石材抜き取り後（西から）
図版37－1　１号土壙プラン検出状況（南から）
－2　同　土壙検出作業状況（南から）
図版38－1　１号土壙炭検出状況
－2　同　完掘状況（上から）
図版39－1　調査地調査後の遠景（南から）
－2　同　近景（北から）

図版40－1　調査地調査後の近景（西から）
　　－2　調査説明会風景
図版41　調査区内出土遺物
図版42－1　試掘調査地調査前全景（東から）
　　－2　同　調査後全景（西から）
図版43－1　Ｅ－１トレンチ石材検出状況（上から）
　　－2　同　南側土層（北から）
図版44－1　Ｅ－２トレンチ周溝・主体部プラン検出状況（上から）
　　－2　同　南側土層（北から）
図版45－1　Ｅ－３トレンチ周溝・主体部プラン検出状況（北から）
　　－2　同　南側土層（北から）
図版46－1　Ｅ－３トレンチ完掘状況（東から）
　　－2　同　遺物出土状況
図版47－1　Ｅ－４トレンチ調査後の状況（東から）
　　－2　同　南側土層（北から）
図版48　試掘調査地内出土遺物

第Ⅰ章　調査に至る経緯

1．調査に至る経緯

本調査は、島根県那賀郡旭町大字山ノ内地区で開発されている県営農地開発事業（梨園造成）に関連した受託事業として、旭町教育委員会が発掘調査を行ったものである。

この事業は、島根県（浜田農林事務所）を事業主体、及び旭町を関係主体として、事業規模118ha・造成面積76,8ha、事業費23億円、事業期間は昭和62年度から10ケ年継続事業という大規模な事業計画で、本町の活性化事業の一貫として導入されたものである。

事業実施に先立ち、昭和62年４月から島根県教育委員会文化課の協力を得て、本町としては初めての大がかりな遺跡の分布調査を、開発予定地内において実施した。その結果、当初から既に周知されていた犬立古墳・柏尾原火塚・坂本奥１、２号墳の４基の他に、開発予定区域内において17基、区域外に10基の古墳及び、要注意箇所７ケ所を確認した。そして、これらを総称して山ノ内古墳群（山ノ内１号～27号墳）とした。以後、この調査結果を踏まえ県教育委員会、事業主体、関係主体により、遺跡の取扱いについて協議がなされた。そして、開発側より発見された古墳を開発計画から除外する大幅な計画変更案が提示され、造成計画上やむなく発掘調査をおこなった14号墳（昭和63年度[(1)]調査済み）を除き、変更案に基づき事業が進められることに至った。

平成２年には分布調査済み区域内において、事業主体・関係主体との間で再度造成工事の変更計画（追加）が盛り込まれ、平成２年度事業で1,6haの追加造成工事が発注された。工事実施段階になり、造成区域内で横穴式石室を埋葬主体とする古墳が発見され、山ノ内28号墳と称し発掘調査を行った[(2)]。しかしその後、この造成地において、営農上形状不良地であることが近隣産地の事例により判明し、入植希望者から不正形な圃場の区画を修正して欲しい旨の要望が事業主体にあった。これを受け、分布調査の経緯を踏まえ、島根県文化課、旭町教育委員会、事業主体との間で再三にわたる協議を行い、試掘調査を経て発掘調査を実施するに至った。平成２年の時点で28号墳まで確認されていたため、この古墳群の名称は既周知の12・13号墳と試掘調査で確認された29・30・31・32・33・34・35・36号墳とした。

現地調査は、平成４年８月27日から平成５年３月31日まで行った。

註

(1) 旭町教育委員会　県営農地開発事業に伴う『山ノ内14号墳発掘調査報告書』　1989年

(2) 旭町教育委員会　〃　『山ノ内28号墳発掘調査報告書』　1992年

第Ⅱ章　遺跡の位置と歴史的環境

旭町は、島根県のほぼ中央の浜田市より南西に25km、広島県々境に位置する。山ノ内古墳群は、那賀郡旭町大字木田・山ノ内地区1635番地外に所在し、北側約１kmで邑智郡桜江町に隣接する。標高約290mあまりの当地域としては緩やかな丘陵地帯であり、この丘陵の南側は比較的広い水田地帯（標高約250m）が広がっており、江川の支流である木田川が北西方向に流れている。また、丘陵の北側（大字山ノ内）は狭小な谷水田が点在する。この地域の史跡として社寺の歴史上からも名高い正蓮寺山門がある。和田（大字和田）の工匠として後世に名を残し、明治18年に没した豊原喜一郎が建立したもので、喜一郎傑作の石見三門のひとつである。山門の龍・獅子・鶴の彫刻は特に有名である。

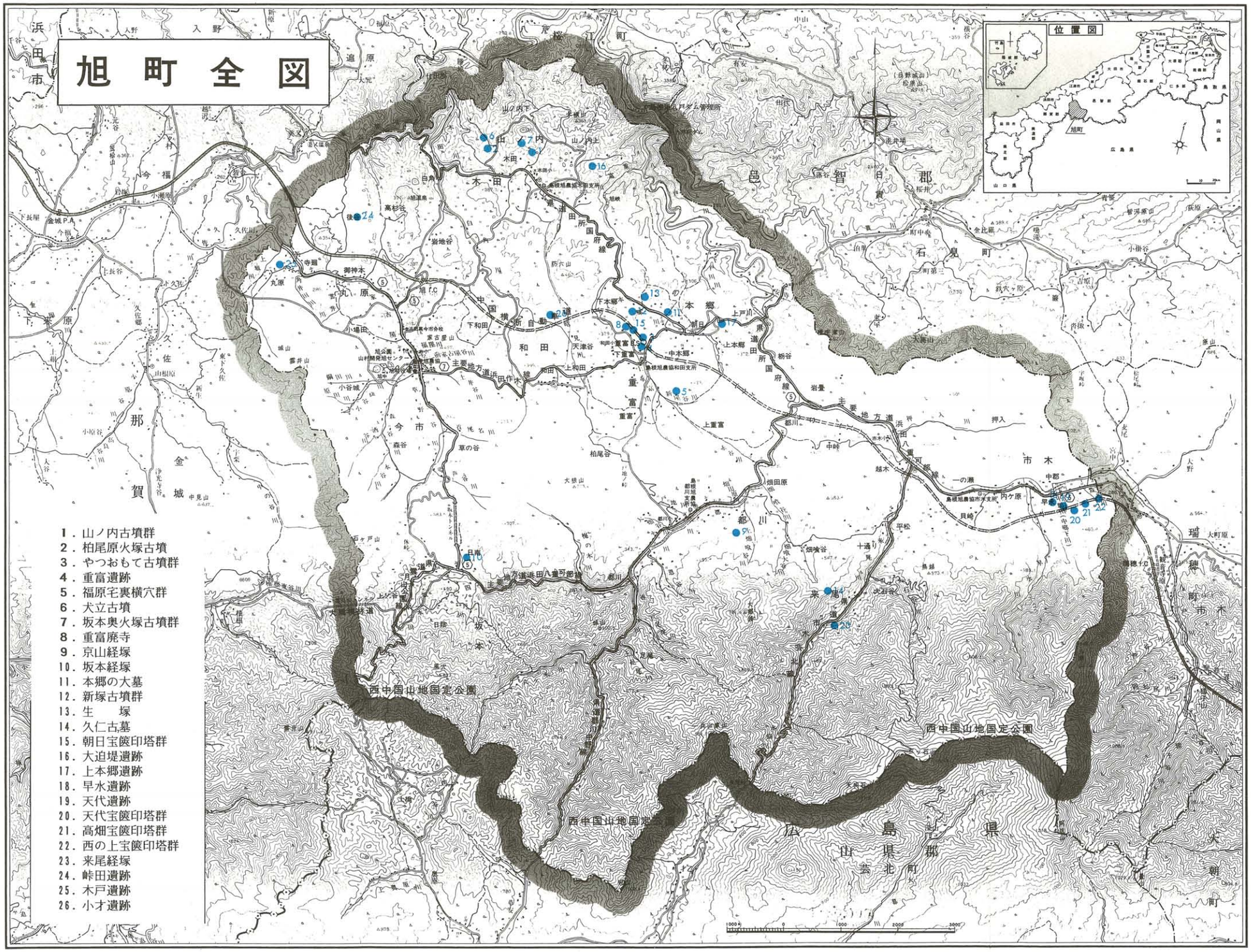
当初この地域の古墳は、県営農地開発事業（梨園）の開発計画に伴い実施した昭和62年度の分布調査によって、既周知の古墳４基（犬立古墳・柏尾原古墳・坂本奥１・２号墳）とあわせ総数40基の古墳群が存在することが明らかになっていた。そして、この事業対象地にあたる丘陵の尾根が「木田」と「山ノ内」の字境になっているため山ノ内１号墳～27号墳とし、平成２年に発見され調査を行った古墳については山ノ内28号墳と称し、今回発見された古墳については山ノ内29・30・31・32・33号墳、試掘調査で確認された古墳は34・35・36号墳とし、現時点で総数40基が確認されている。

町内においてこのような古墳群としては、著名な重富の「やつおもて古墳群」がある。このやつおもて古墳群は、山ノ内地区よりさらに南東へ約５kmのところに通称下重富といわれる人家集落の裏山の中に点在しており、現在のところ24基が知られており、前方後円墳１基も確認されている。

平成２年度にはこの重富地区、及び更に西方約１kmの和田地区において中国横断自動車道建設に伴う発掘調査が島根県教育委員会によって実施された。なかでも、重富のやつおもて18号墳[(1)]は、全長26m高さ３mの規模を有し、石見山間部では最大級の古墳であることや、２段築成で葺石・造り出しを持ち、中央の埋葬施設には竪穴式石室と箱式石棺の２基を備えていたことなど、他地域の大型古墳にみられる特徴を具備していることなどから、かなり広い範囲を支配した首長の墓であったことが明らかになった。

また、この古墳の南側下斜面には、石見地方で３例が知られているにすぎない奈良時代の古代寺院（重富廃寺）に使われていた瓦を焼いた窯跡１基と、同じ時代の16棟の竪穴住居からなる集落跡[(2)]も検出された。

また、和田の小才[(3)]遺跡では、大小13基の古墳が発見・調査され、これらの中でも最も見晴ら



第1図　山ノ内古墳群の位置と周辺の遺跡分布図

しがよく高いところにある小才１号墳は特に大きく、一辺７m前後の方形の墳丘をもっておりその中央に自然石や割石を積み上げて全長5.5m、幅1.4mの横穴式石室を造っていた。石室内外の遺物も、他の古墳に比べ多く、鉄刀や須恵器のほか、網に使ったと思われる160個に及ぶ土錘（土のおもり）も出土している。

これらのことから、旭町重富・和田地区は、古代の石見地方山間部にあって、政治文化の中心地であったことが解明されたが、この度調査を行った山ノ内古墳群についても、石見地区においては、やつおもて古墳群に匹敵する有数の古墳群であり、当地域の歴史を解明する上で重要な意味をもっている。

註

(1) 島根県教育委員会『中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅳ　第Ⅳ章　1992年

(2)　〃　第Ⅲ章　1992年

(3)　〃　第Ⅱ章　1992年

第Ⅲ章　山ノ内古墳群の構成

那賀郡旭町大字木田から大字山ノ内にかけての丘陵には、今回発見された古墳を含め現在40基の古墳が確認されている。遺跡の名称は、周知の遺跡であった坂本奥火塚１号・２号墳、柏尾原古墳、犬立古墳についてはそのまま用い、昭和62年の分布調査によって発見された古墳については、便宜的に山ノ内１号墳・２号墳・３号墳……とし、今回発見された古墳については29・30・31・32・33・34・35・36号墳と称することにした。

これらの古墳は標高250～300mの丘陵頂部から丘陵斜面にかけて分布している。周辺の水田からの比高は30～60mである。盛土が流失したり、盗掘を受けたため不明なものもあるが、多くは直径10m前後、高さ１mあまりの円墳と考えられる。これらは石材の露出状況などから横穴式石室が多いものと推測されていたが、今回調査を行った古墳のように、更に時代を逆上った箱式石棺・木棺・土壙墓の類も多く存在するものと考えられる。

立地として丘陵頂部あるいは尾根上に位置する古墳は25基ある。山ノ内１～４・６～13・19～25・27～32号墳などである。このうち墳丘を画する溝の痕跡を確認できるものは２・10・11・21・23・27・28号墳の７基である。

丘陵斜面に築造されているのは、５・14～18・26・33～36号墳、坂本奥１・２号墳、柏尾原

古墳、犬立古墳の15基である。このうち16・17・18号墳、坂本奥１・２号墳、柏尾原古墳、犬立古墳は山側に顕著なカット面と溝の痕跡が認められる。

これまでに確認している40基の古墳は分布状況からおおまかに６つのグループに分けることが可能である。（第２図）あくまでも、現在確認できるものに基づいたグループ分けであり、今後の調査により変更が生じる可能性があるが、ここでは便宜上東側に位置するグループから順次Ａ・Ｂ・Ｃ…Ｆと仮称しておくことにする。

Ａ群　山ノ内14・15・16・17・18号墳の５基である。16・17・18号墳は丘陵麓近くの緩やかな斜面に、比較的近接した状態で分布している。14・15号墳はいずれも丘陵斜面に位置するがそれぞれ単独で分布している。

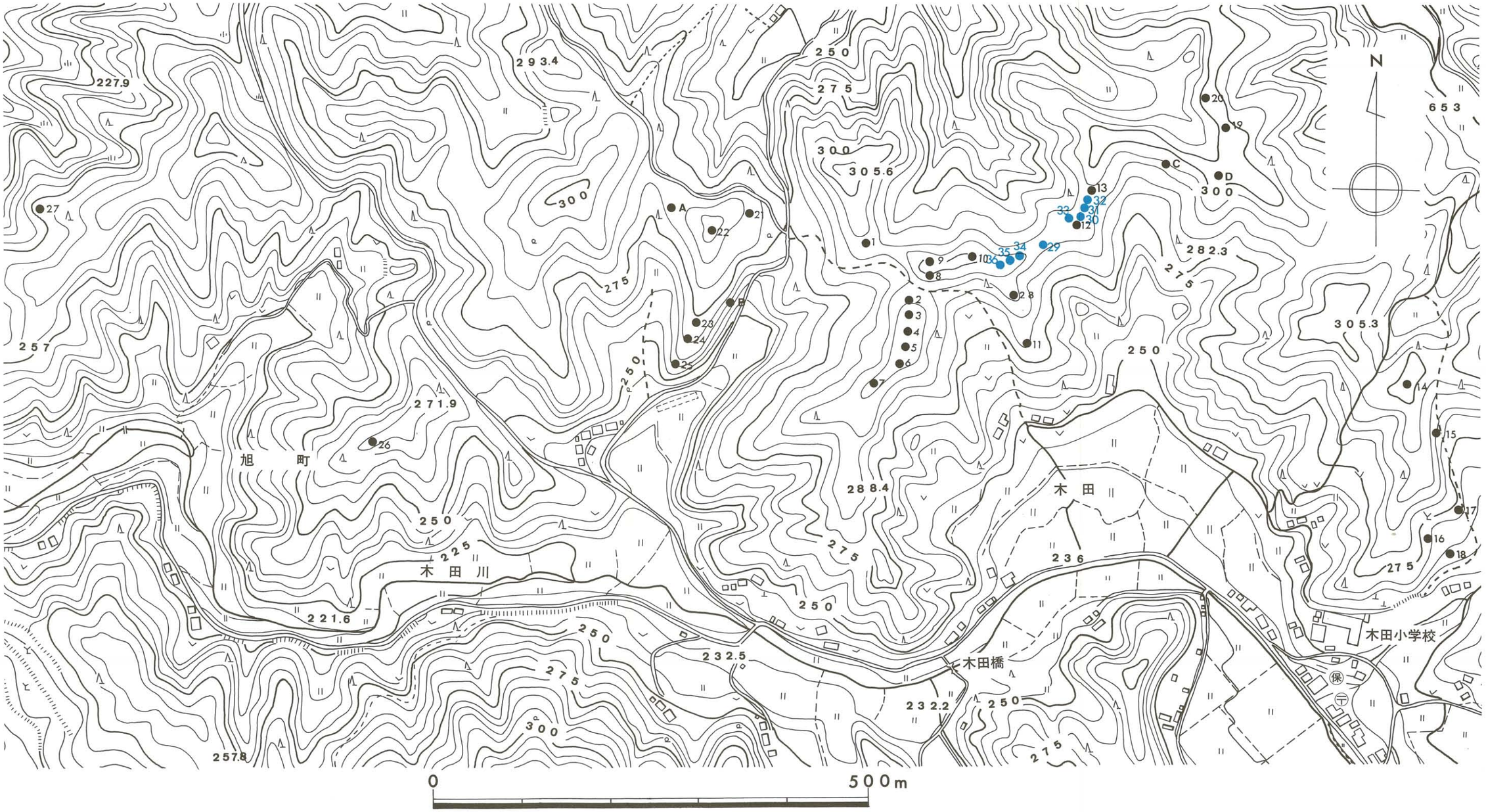
Ｂ群　山ノ内12・13・19・20・29・30・31・32・33号墳、坂本奥１（Ｃ）・２号墳（Ｄ）の11基からなる山ノ内古墳群中最も高いところに位置し、20～33号墳の発見により比較的近接した状態で分布している事が分かった。12・13・19・20・29・30・31・32・33号墳が丘陵頂部や丘陵尾根上に位置するのに対し、坂本奥１・２号墳は丘陵の急斜面に位置し、山側に顕著なカット面と溝を有する。なお、19号墳は径17,2×1,5m、高さ1,5mを有する円墳で、山ノ内古墳群中では最も大きい。

Ｃ群　山ノ内１・２・３・４・５・６・７・８・９・10・11・28・34・35・36号墳の15基からなる。２～９号墳は近接して分布しており、１・10・11号墳はやや離れそれぞれ単独で分布していると思われていたが、28号墳および34・35・36号墳の発見によりこれらのグループも近接することが分かった。５号墳以外はいずれも丘陵の頂部や尾根上に位置しているＣ群は山ノ内古墳群中最も多く存在し墳丘の遺存状態も比較的良好なものが多い。

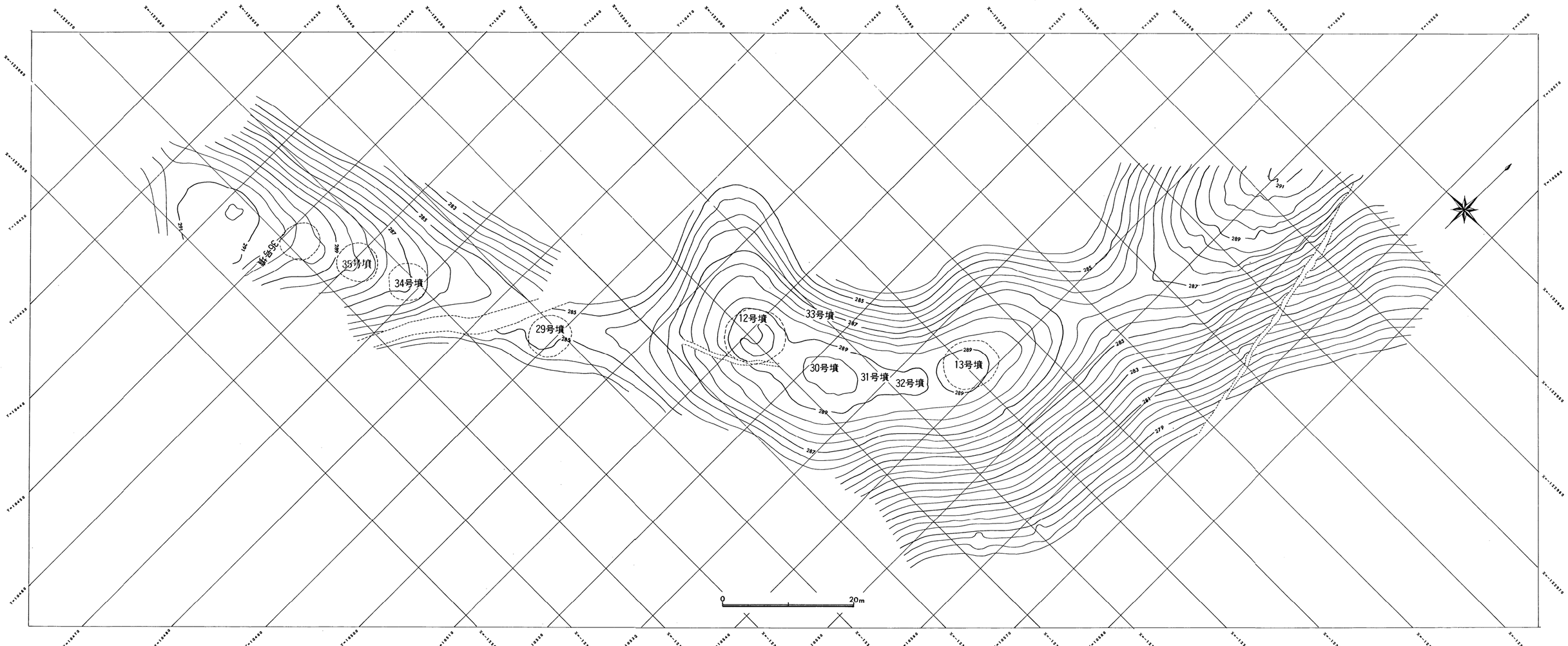
Ｄ群　山ノ内21・22・23・24・25号墳、犬立古墳（Ａ）、柏尾原古墳（Ｂ）の７基からなる。21～25号墳が丘陵頂部や尾根上に位置するのに対し、犬立古墳、柏尾原古墳は丘陵斜面に位置する。犬立古墳は丘陵南西斜面に位置する円墳で、8,0×9,0m、高さ1,1mある。墳頂部に3,6×3,2m、深さ0,8mの盗掘坑があり、周辺に多くの石材が散乱していることから横穴式石室と思われる。柏尾原古墳は、6,0×6,3m、高さ1,1mの円墳で、横穴式石室の天井石と思われる大きな石材が露出している。

Ｅ群　現在のところ山ノ内26号墳の１基のみである。丘陵斜面に位置し、盗掘坑内に若干の石材が認められるが、墳形・墳丘規模等についてはまったく不明である。

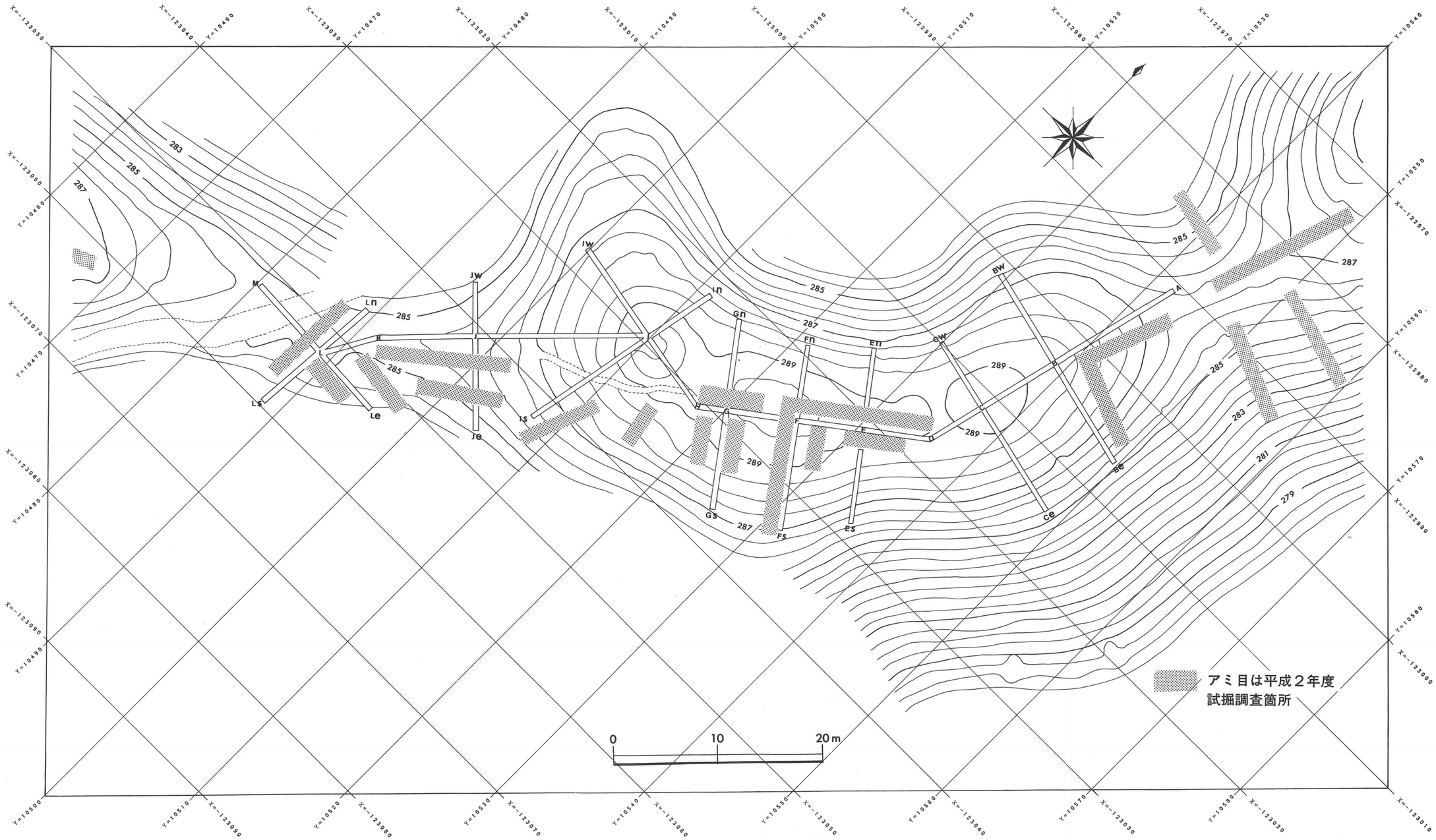
Ｆ群　現在のところ山ノ内27号墳の１基のみである。丘陵の尾根上に位置する円墳で、5,0×5,1m高さ0,5mの小規模な古墳である。



第2図　山ノ内古墳群分布図



第3図　山ノ内古墳群調査前地形図



第４図　山ノ内古墳群調査区配置図

第Ⅳ章　山ノ内古墳群

1．山ノ内古墳群の概要

山ノ内古墳群は総数40基からなる古墳群で、発掘調査は12,13号墳、29～33号墳の７基について行った。

古墳は旭町大字木田と山ノ内の字境を南西～北東に伸びるなだらかな丘陵地に所在する。この丘陵は頂部が比較的平坦で、古墳のほとんどがこの丘陵の頂部にある。

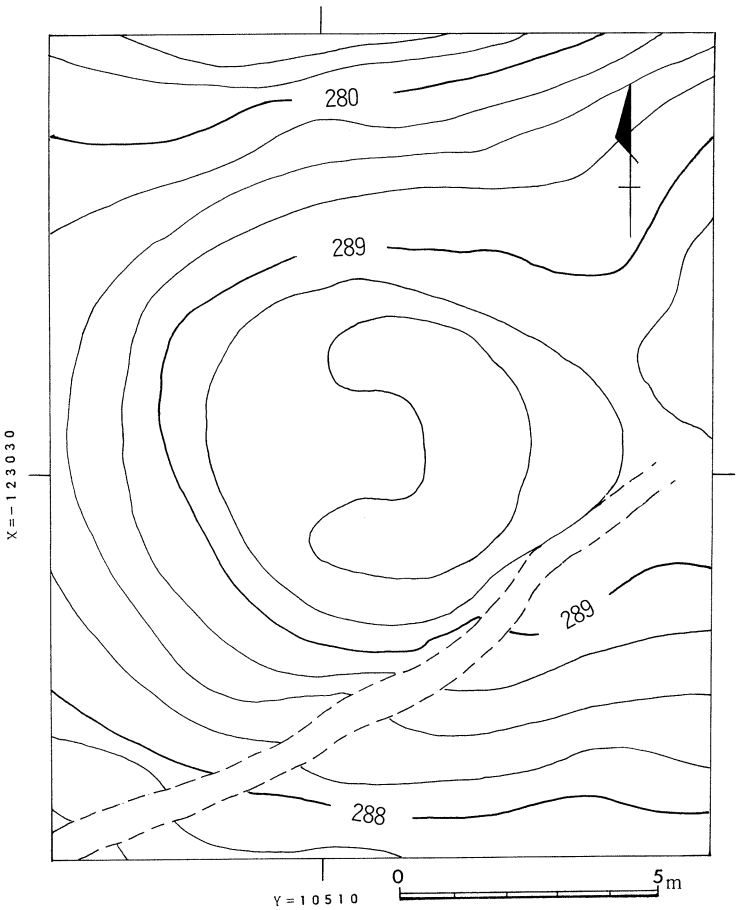
配置は標高の一番低い所に29号墳が位置し、北東約30mに12号墳、続いて６～７m間隔に30・31・32・13号墳がほぼ直線状に点在し、12号墳から北東へ７mの北側の斜面に33号墳が位置する。

第１節　12号墳の調査

1．調査前の状況

12号墳は、今回調査区域内に現存する古墳としては、尾根稜線上の標高の一番高いところに位置する。昭和62年の分布調査で発見されたもので、規模は、9,0×9,3m・高さ0,8mの円墳であると推定され、盗掘を受けており墳頂部に２個の石が露出しているが内部構造については不明であった。

立木伐採後の観察では墳頂部南側に山道が通っているなど墳形はかなり改変を受けていたが、規模は当時の調査とほぼ同等であると推定された。



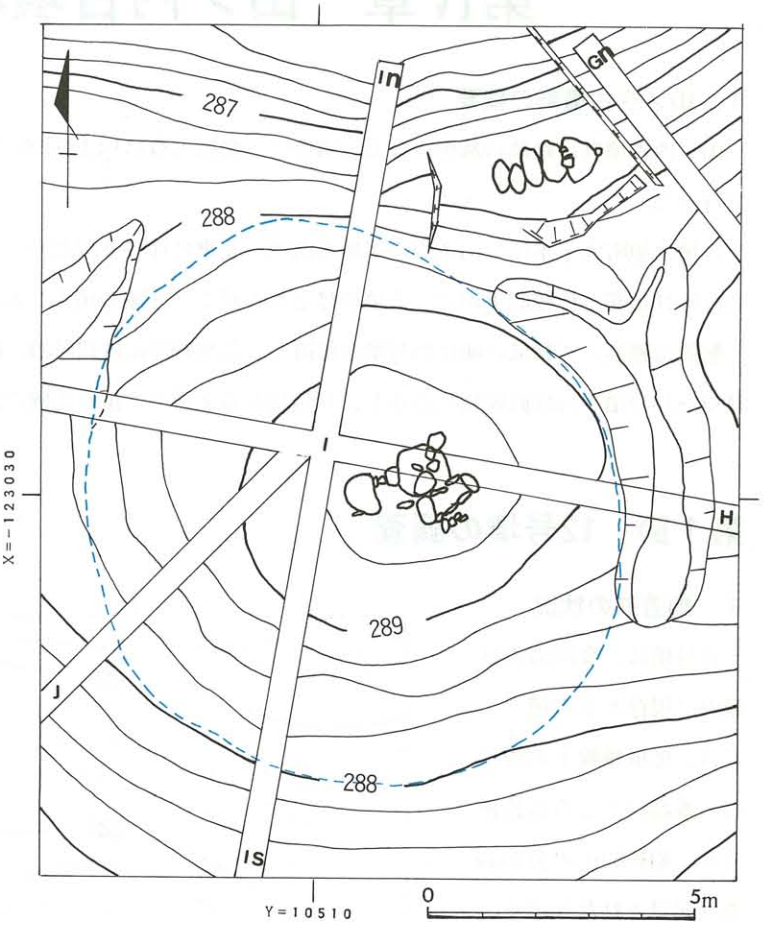
第５図　12号墳調査前の墳丘

2．墳　　丘

古墳には発掘調査に先立ち、全ての古墳を縦断するA～Mの基準点を設定し、基準杭を打った。

この基準点を直交するようそれぞれ縦・横断の土層観察用の畦を残しながら調査を進めることにした。大略東西南北であることから、Bw・Be・Cn・Cs…と標示した。

12号墳の墳丘上には表土除去に先立ち、30号墳H－I線延長上の墳頂部をIとし、そこから十字の字形に基準線を設定し、H－I，I－Iw，I－In，I－Isとした。



第６図　12号墳調査後の墳丘

調査は基準線に沿って畦を残しながら、墳丘全面の表土を除去した。表土は、10cm～20cmと薄く、表土下で盛土を確認し墳丘を検出した。

墳頂部には、盗掘を受けたためと思われる人頭大の石材が多数散乱しており、表面観察時には確認できなかったが、小型の箱式石棺が表土直下で検出され、２以上の主体部を有する古墳であることがこの時点で判明した。

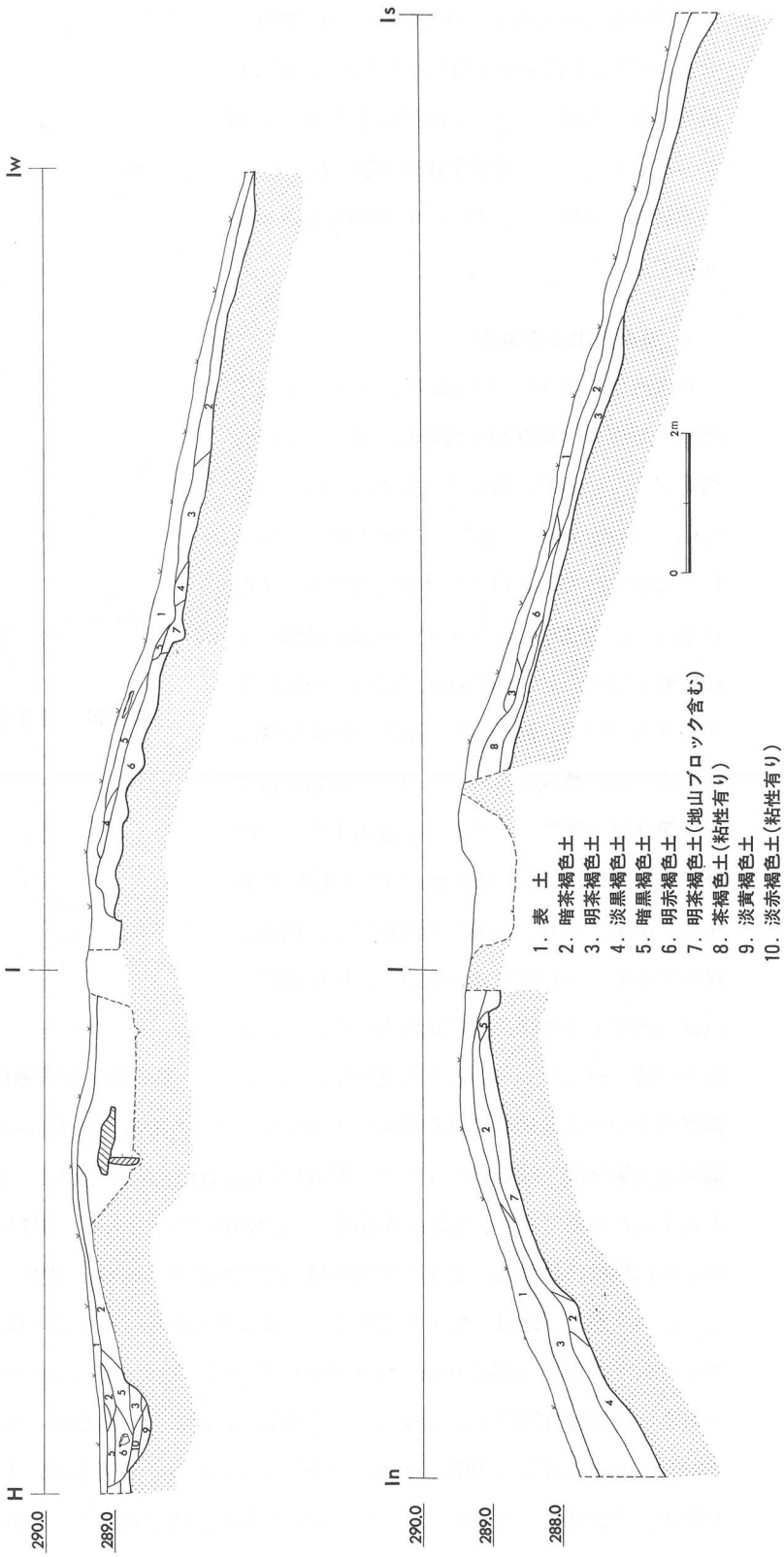
墳丘の規模は、南、北方向の墳端が明瞭でないことから大略で示せば、盛土と測される赤褐色土端で約10,5m、東、西方向については、墳端から検出した周溝から判断して約9,5mと推定される。高さについては、旧表土が明確でないため不明瞭ではあるが、赤褐色土を墳丘の盛土と考えるならば、現状で1,4mの高さを有する円墳と考えられる。又、墳丘北西側にはテラス状の平坦面が認められ、出土遺物はないが、祭祀的な場所としての意味の強いものと思われる。

3．周　溝

12号墳の東側周溝は、中央部で幅2,0m、深さは0,8mを測る。

又、30号墳の西側墳端に接して重複しており、その切り合い関係については不明であるが、結果的には両者を区画する役目を担っているようである。南端はしだいに浅く不明瞭になりながら消滅するが、北端は途中から左右に枝分かれの形状を呈し、しだいに浅くなりながらそれぞれ消滅する。

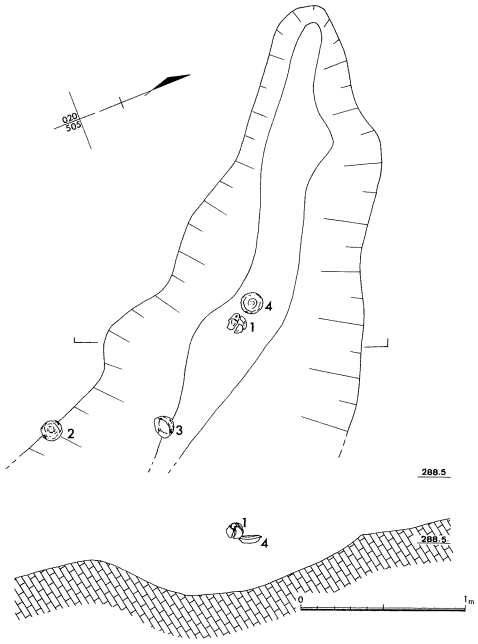
12号墳の西側周溝は、やや北西側に片寄っており、中央部で幅2,2m、深さは0,3mを測る。北側端はしだいに細くなりながら消滅するが、南側については不明瞭であり明確に検出できなかった。この西側周溝は、古墳を画する役目より、北西側墳端のテラス部を削り、平坦に整形したものであると思われる。



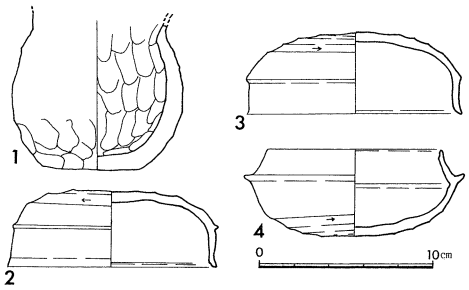
第7図　12号墳丘縦・横断土層実測図

周溝内からは土師器の小短頸壷と須恵器坏蓋2点、及び須恵器坏身1点が出土した。いずれも周溝の底より浮いており、淡黒褐色土層の上部から出土しており、周溝全体に分散し出土した。

須恵器については、検出時の破損を除きほぼ完形であった。



第８図　12号墳周構内遺物分布図



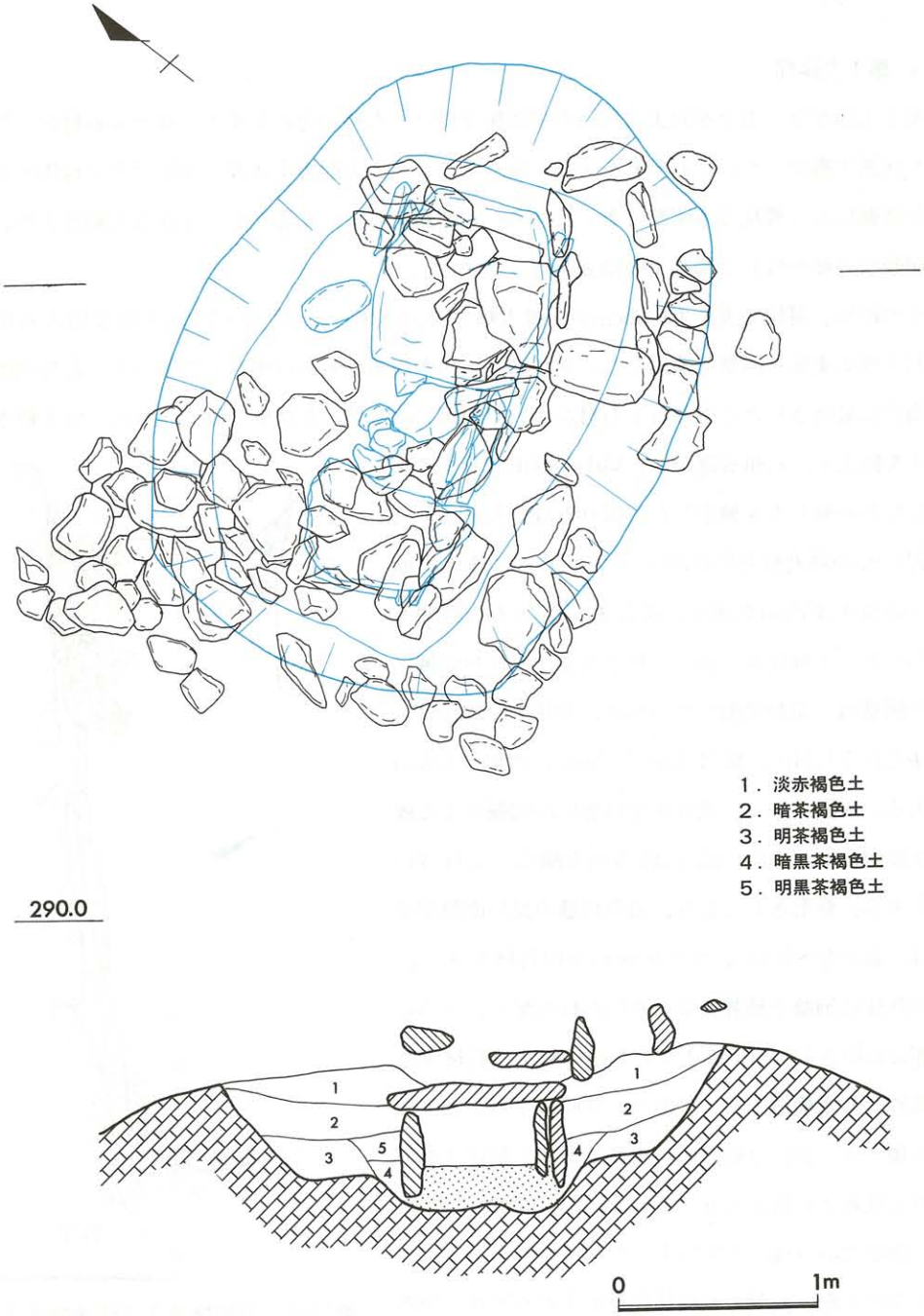
第９図　12号墳周溝内出土土器実測図

a　周溝内出土の遺物

周溝内からは4点の土器が出土した。1は土師器小短頸壷（第9図・図版41－1）で、口縁部を欠いているが、現存で、器高8,7cm、口径7,8cm、底径4,5cmを測る。口縁は短くやや外側へ屈曲し、丸みを帯びた体部を有する。手捏ね手法で、内面は口縁部まで、外面は底部に指頭圧痕が残る。又、内外面上部には赤色顔料が塗布されている。胎土は2mm大の石英を含みやや粗いが、焼成は良好である。2は須恵器坏蓋（第9図・図版41－2）で、器高4,4cm、口径12cmを測る。胎土は1mm以下の砂粒を若干含むが密であり、色調は暗青灰色で、焼成は良好である。口縁部はほぼ直立し、口縁端部は内側に内傾する凹状の段が認められる。又、頂部との境の稜にはしっかりした段を有している。調整はやや平らな頂部には右回転による回転ヘラ削りを施し、他は回転ナデである。3は須恵器坏蓋（第9図・図版41－3）で、器高4,7cm、口径12,5cmを測る。胎土は1mm以下の砂粒を若干含むが密であり、色調は淡青灰色で、焼成は良好である。口縁部はほぼ直立し、口縁端部はやや内側に内傾する。頂部との境の稜には段が認められる。調整は、外面頂部は左回転による回転ヘラ削り、他は回転ナデである。4は須恵器坏身（第9図・図版41－4）で3と1組になるものである。器高5,0cm、口径10,2cmを測る。胎土は、2mm大の長石を若干含むが密であり、色調は青灰色で、焼成は良好である。口縁には、内傾する高さ1,5cmのかえりを有しており、内面の底部との境には凹状の段が認められる。外面底部にはヘラ記号痕が見られる。調整は、外面底部に左回りの回転ヘラ削りを施し、他は回転ナデである。

4．埋葬施設

主体部は墳頂から2基検出された。墳丘中央部の大型の箱式石棺を第1主体部とし、第1主体部のやや南東側の表土直下から検出した小型の箱式石棺を第2主体部とした。



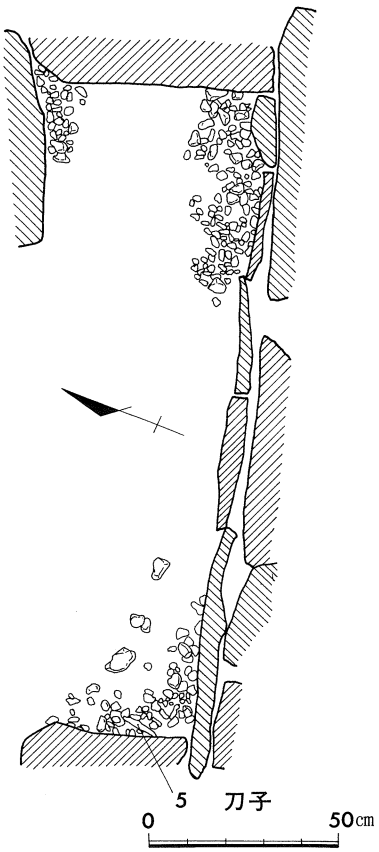
第10図　12号墳主体部実測図

第１主体部は地山を掘り込み、石棺を構築し盛土を施しているのに対し、第２主体部は第１主体部の墓壙内埋土上部を削り込み構築されており、時期差については、明確なことは分からないが、築造順序は第１主体部の後に、第２主体部が造られていることが状況から判断して明らかである。

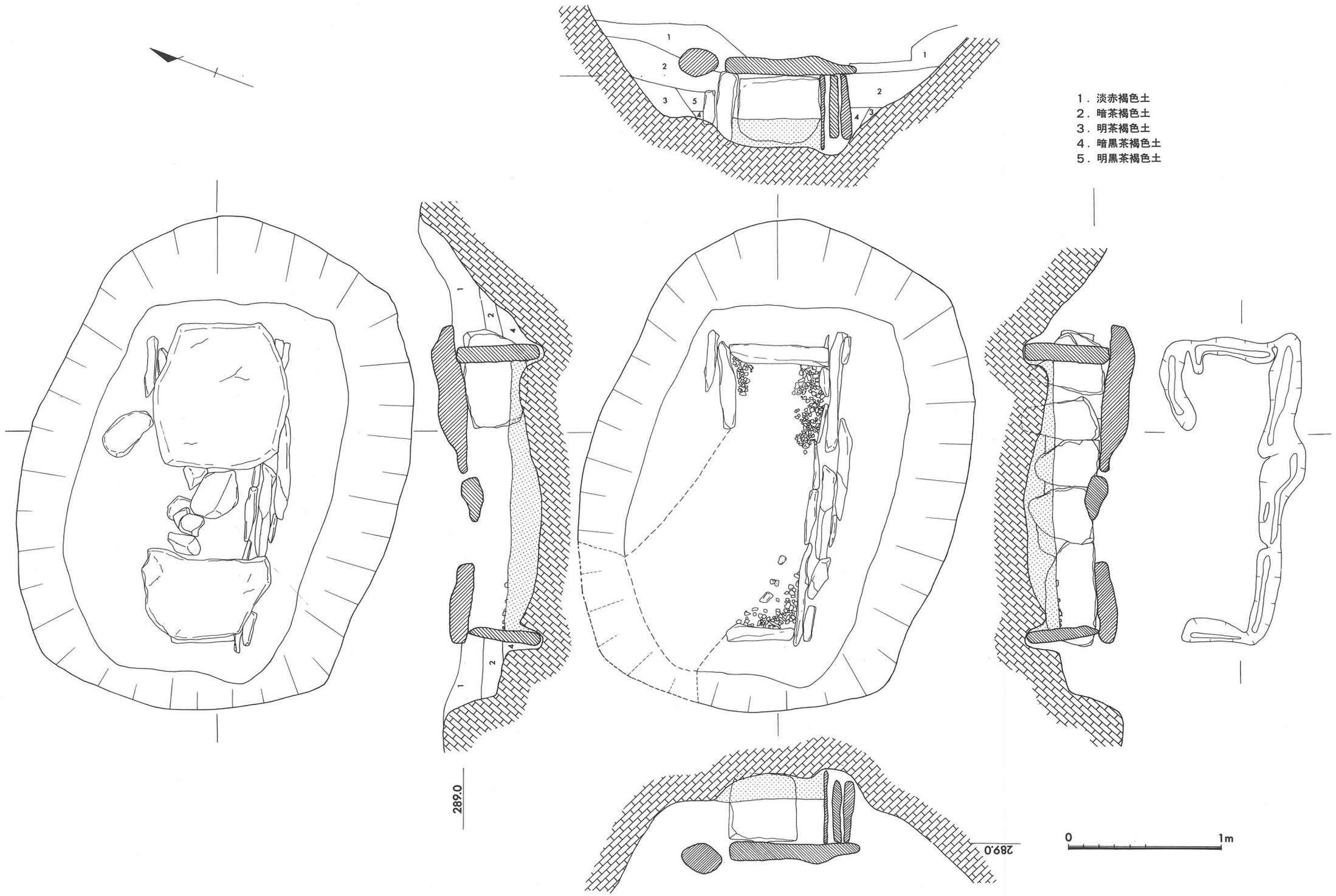
a 第１主体部

第１主体部は、表土を除去した時点で盗掘を受けたためと思われる大小様々な石材が、散乱した状態で露出した。それぞれを実測し取り上げ、盛土上面で主体部の平面プラン検出を試みたが盗掘による攪乱で不明瞭であったため、一部露出していた蓋石から任意な主軸を定め、土層観察用の畦を残して攪乱土の除去を行った。

その結果、現状で表土下約50cmから最大幅で90cm×90cm，80cm×50cmを測る箱式石棺の蓋石２枚を東側と西側で検出した。しかし、石棺中央部は蓋石は遺存しておらず、石棺内部に人為的に破壊されたと思われる石材が、石棺内部に落ち込んだ状態で確認された。引き続き攪乱土を除去し、石棺底部から、地山が露出するまで確認しながら掘り方を検出した。掘り方は、長辺3,3m、短辺2,5mの隅丸長方形状のプランを呈し、盛土上面からの深さは50cmを測る。次に蓋石を除去し側壁を検出した。主軸はＮ－70°－Ｅである。やはり盗掘により側壁の一部が欠損していたが、現状での規模は、内法で長さ1,74m、幅は東側で0,55m、西側で0,45mである。床面からは、遺存状態は悪いが円礫による礫床を検出した。内部の高さは0,40mを測る。石材は自然石を割、整形されており、遺存状態の良い南側側壁では、長さ25～80cm、厚さ６～８cmの石材を並べ、その外側に倒壊を補強するための石材を配し、さらに内側には厚さ2,5cmに加工された薄い板状の石材を張り詰めた３重構造となっており、往時の丁寧な加工技術が窺える。頭位は幅の広い東側であると推定され、側壁で挟み込む構造となっている。出土遺物としては、足位側壁に沿う様な形で出土した刀子１本がある。盗掘を受けた際、流動した可能性があるため現状の位置にあったものであるかは不明である。



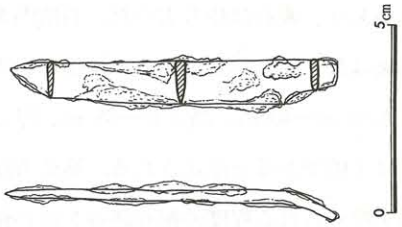
第11図　12号墳第１主体遺物出土状況実測図



第12図　12号墳第1主体完測図

b 副葬品

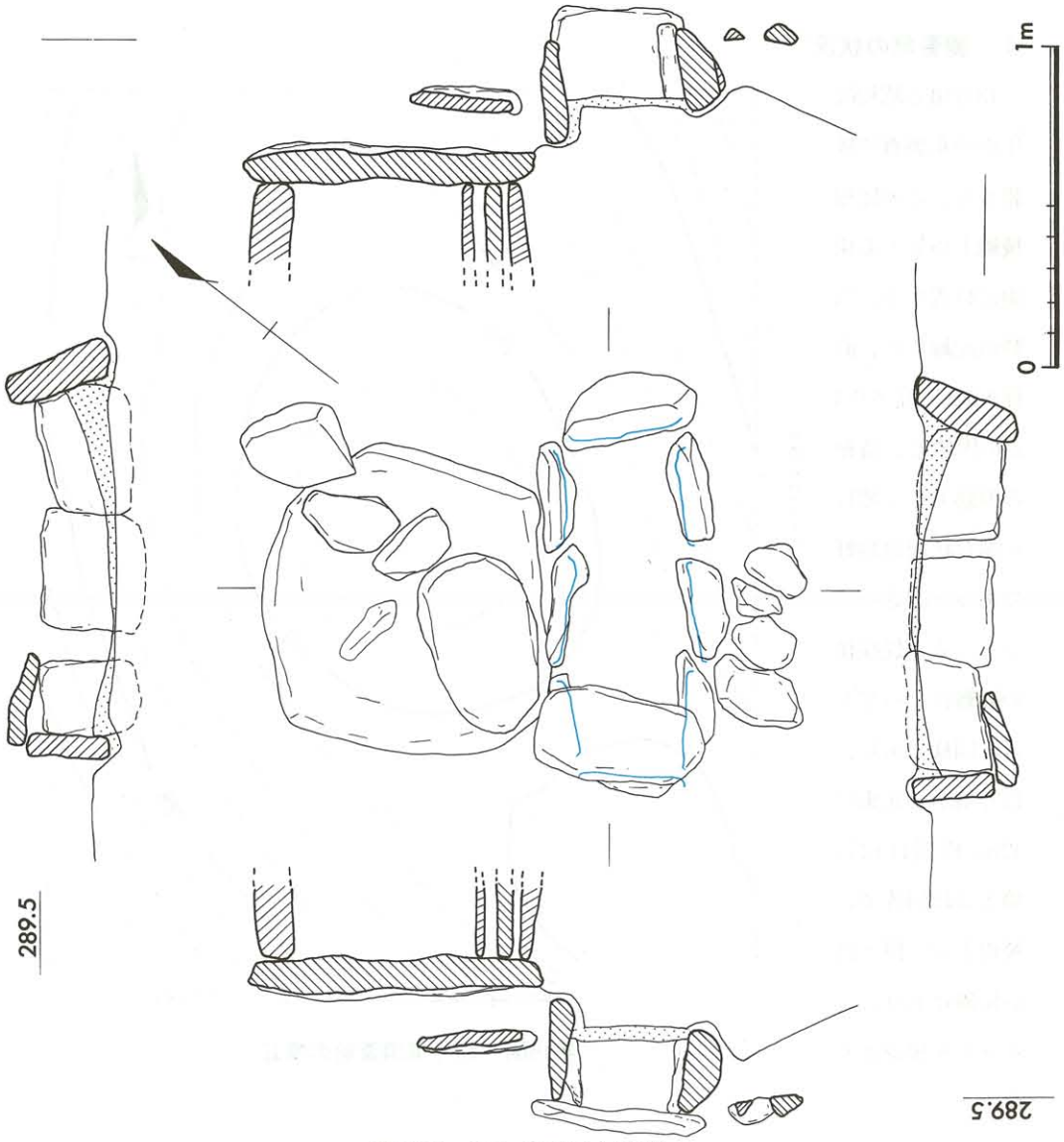
5は刀子（第13図・図版41－5）で、全長8,6cm・身の長さ7,2cm・茎の長さ1,4cmである。身の元幅は1,15cm 同先幅0,95cm・身の厚さ0,2～0,3cm・茎の厚さ0,2cmを測る。刀身には木質等の付着物は認められない。



第13図　12号墳第１主体出土鉄器（刀子）　実測図

c 第２主体部

第２主体部は、地表腐葉土を除去した時点で50cm×30cm、厚さ6cmの蓋石１枚が露出した。表土を除去すると、直下から小型の箱式石棺を検出した。第１主体部と同様に盗掘を受けた痕



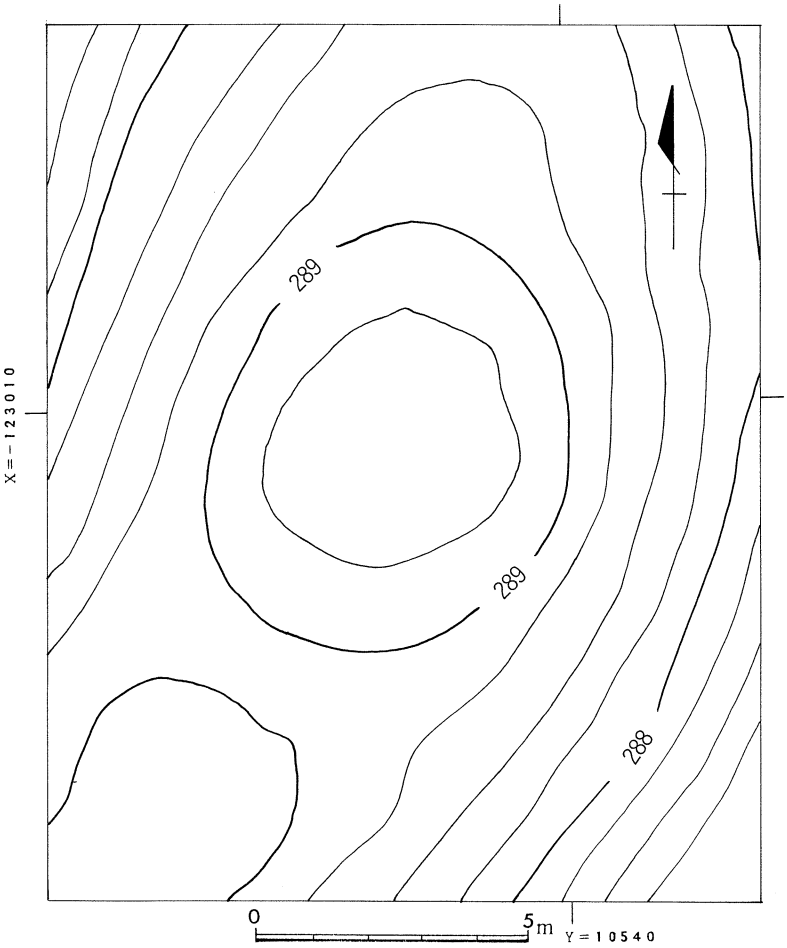
第14図　12号墳第２主体部

跡があり、蓋石は持ち去られ、石棺内部には腐葉土混じりの土砂が混入していた。
主軸はN－55°－Eである。規模は、内法で長さ1,0m、幅は0,25m、高さは0,2mを測る。
長さ25cm～40cm、高さ30～35cm、厚さ10cm～15cmの石材8個からなる小型の石棺で、被葬者は子供であると推定される。築造方法は、第1主体部の盛土上面を切り削り、さらに側壁底部を埋められる程度の掘り込みを行い側壁を据え付けた簡易な構造である。石棺内部にも盗掘は及んでおり、攪乱土を除去し棺底まで精査したが、副葬品はなく、又頭位を示す手がかりとなる枕石等も検出しなかった。

第2節　13号墳の調査

1．調査前の状況

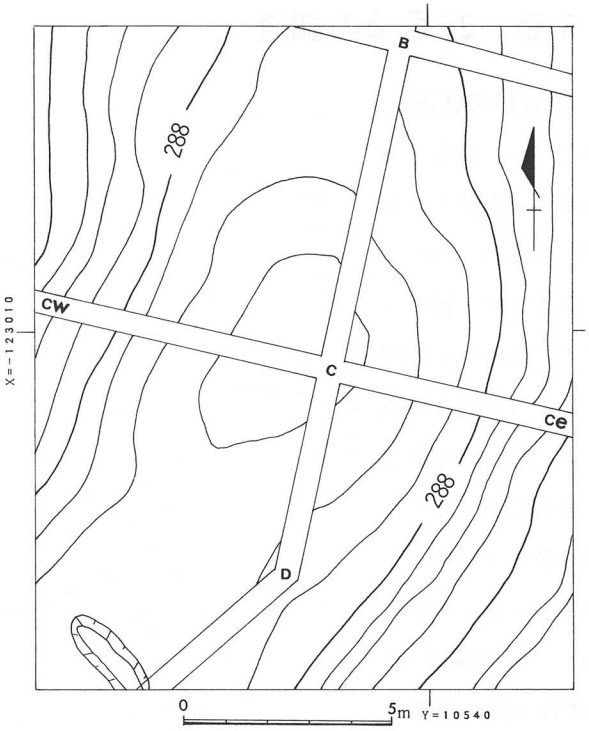
13号墳も昭和62年の分布調査で確認され、この尾根稜線上の最も北東側に位置する。当時の記録には、直径9,0m、高さ0,4mの円墳で、盗掘の痕跡もなく墳丘の遺存状況は良好であると記されている。立木伐採後の観察によってもほぼ同様であり、12号墳から北東に32m、標高は12号墳とほぼ同等で、稜線上の一段と高い位置にあり、マウンドが確認された。



第15図　13号墳調査前の墳丘

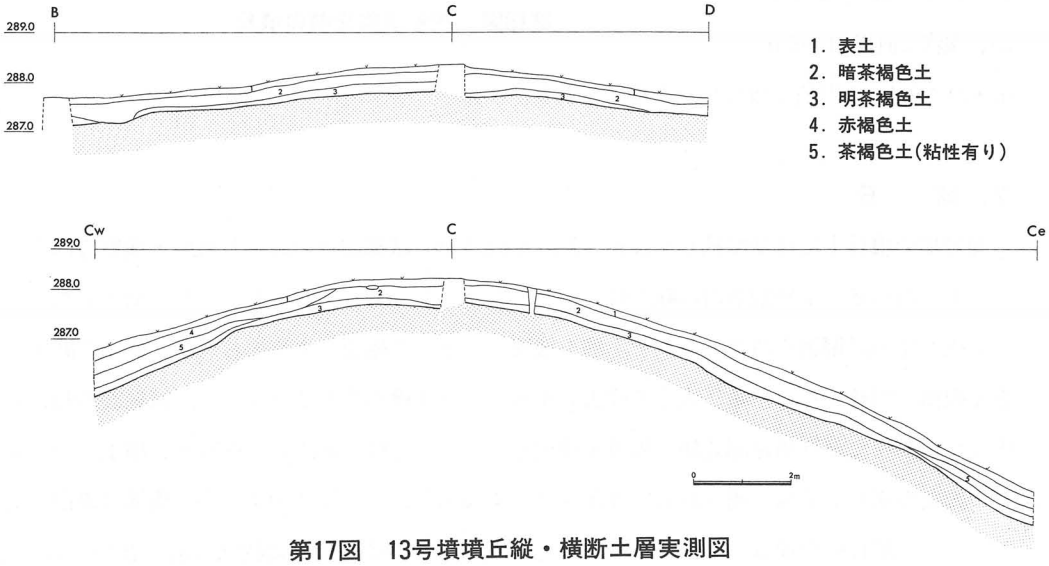
2．墳　　丘

13号墳の墳丘上には表土除去に先立ち、基準杭Cを設定した。そして、C点を軸にC－B，C－D，C－Cw，C－Ceを十字形に設定し、土層観察用の畦を残した。また、13号墳墳丘北端側にはテラス状の平坦面を確認したため、C－D延長線上に基準杭Bを設定し、同様にそれぞれB－A，B－C，B－Bw，B－Beとした。調査は基準線に沿って畦を残しながら墳丘全面の表土を除去した。表土は10～15cmと薄く、その後も精査を行いながら剥ぎ取りを行った。



第16図　13号墳調査後の墳丘

しかし、主体部プラン、確実な墳裾や周溝は検出できないまま地山が露出した。さらにC－Cw，C－Ceの土層観察用の畦の横にトレンチを入れ調査を行ったが遺構は確認できなかった。このように13号墳は、積極的に古墳とすべき根拠に欠け、墳丘状の高まりは自然のものと考えられる。

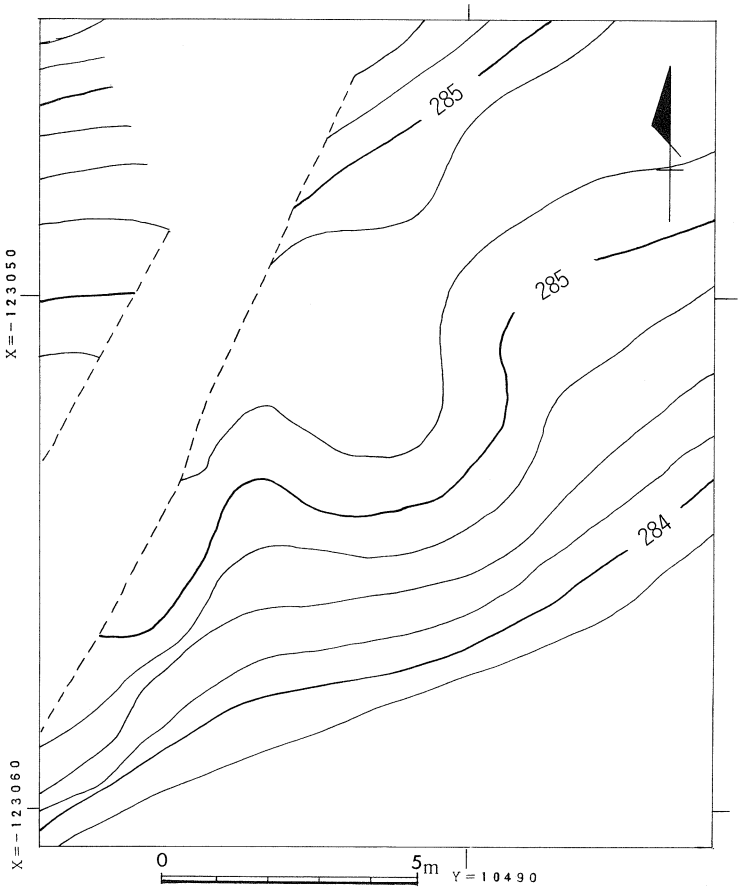


第17図　13号墳墳丘縦・横断土層実測図

第３節　29号墳の調査

１．調査前の状況

29号墳は、調査区域では最も南西側で、12号墳から南西へ30m、尾根稜線上の一番低いところに位置する。昭和62年の分布調査時点では、墳丘の遺存状況が不明瞭であったため要注意個所としていた。しかし、平成２年度に実施した範囲確認（試掘）調査の際、遺構を検出したため29号墳と称した。墳丘頂部の西側には墳形の一部を寸断するように幅２ｍの山道が通っていた。このため不明確ではあるが、現状で直径4,0～5,0ｍ・高さ0,4mの円墳ではないかと推定された。



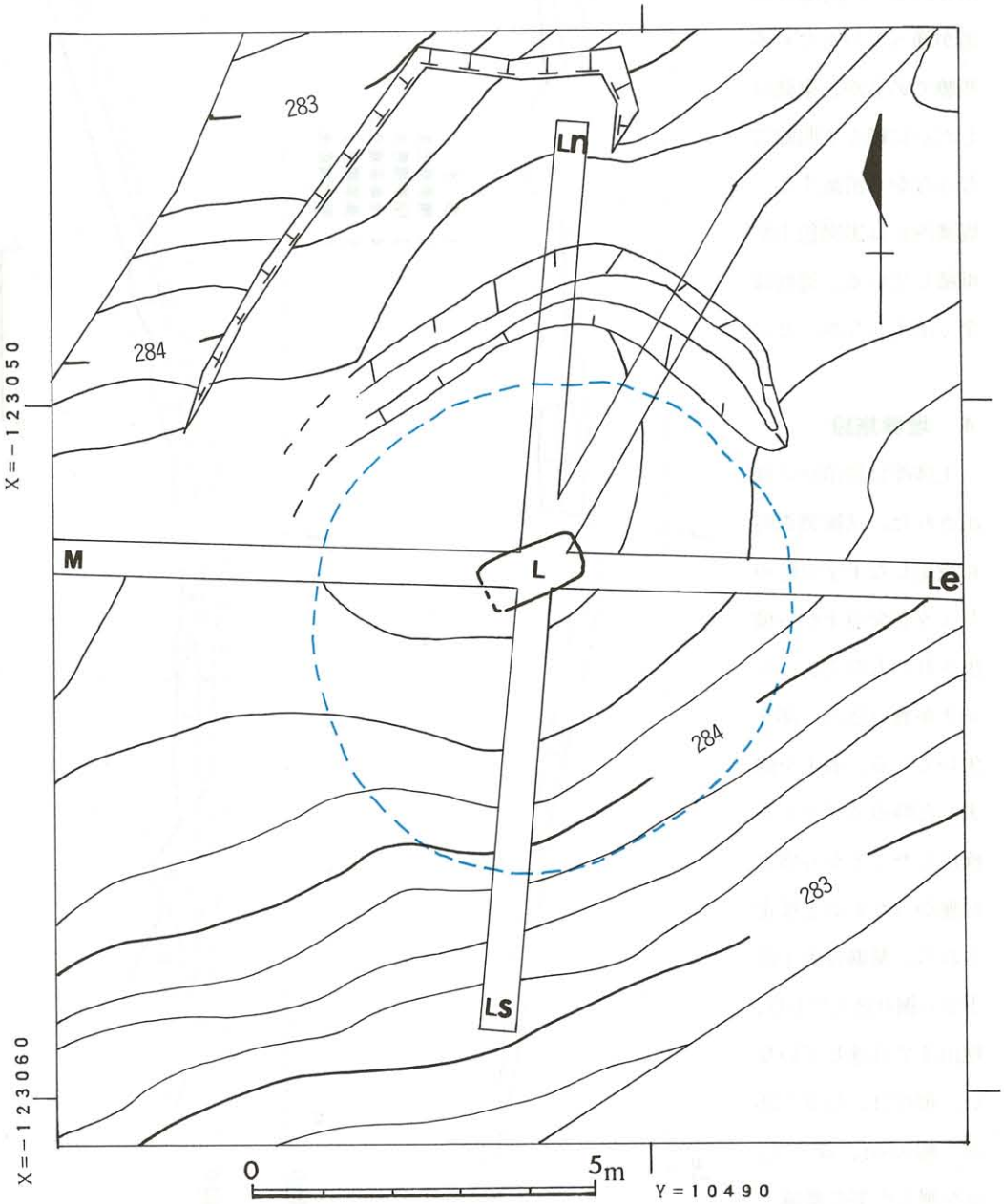
第18図　29号墳調査前の墳丘

２．墳　　丘

29号墳の墳丘上には基準杭Ｌを設定した。平成２年の試掘調査で設定した縦・横断方向のトレンチに合わせ、土層観察用の畦を残し、Ｌ－Ｌｅ，Ｌ－Ｌｎ，Ｌ－Ｌｓ，Ｌ－Ｍとした。

平成２年の試掘調査時のトレンチ土層を観察し、盛土を確認しようとしたが、盛土と断定できる根拠が明確でないため、表土を除去し平面プランを検出することにした。試掘調査時に検出した遺構をたどり墳頂部北側に周溝を検出した。続いて畦を除去してみると、墳頂部のトレンチの交点部から墓壙と測される主体部プランを検出した。主体部南側からは周溝は検出しなかったが、墳丘の規模は、主体部を中心に北側周溝から半径約3,5mで円状に取り巻いており、

南側に折り返すと標高284,25mとなり、斜面の傾斜が変化する地点でもあるため、ほぼ問題はないと思われる。すると南北は約７ｍと推定される。東西については西側に山道が通っており地形が変貌していたため不明瞭であるが、周溝端を延長すれば大略７ｍの円墳と考えられる。



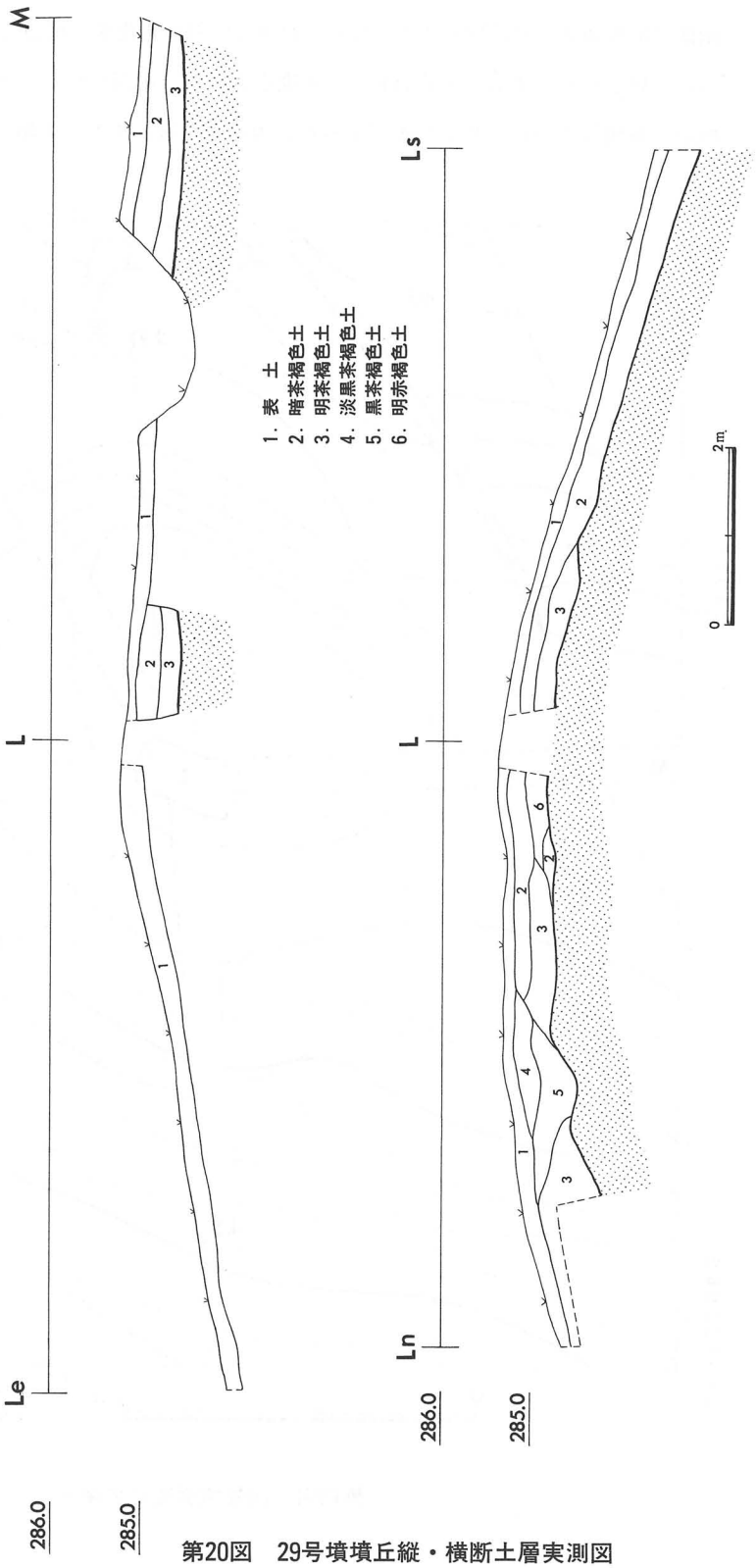
第19図　29号墳調査後の墳丘

3．周　　溝

29号墳の周溝は、幅1,0～1,2m、深さは0,7mを測る。西側端は山道が通っていたため不明瞭であるが、東側はしだいに細く不明瞭になりながら消滅する。周溝内には黒褐色土が堆積している。遺物は全く出土しなかった。

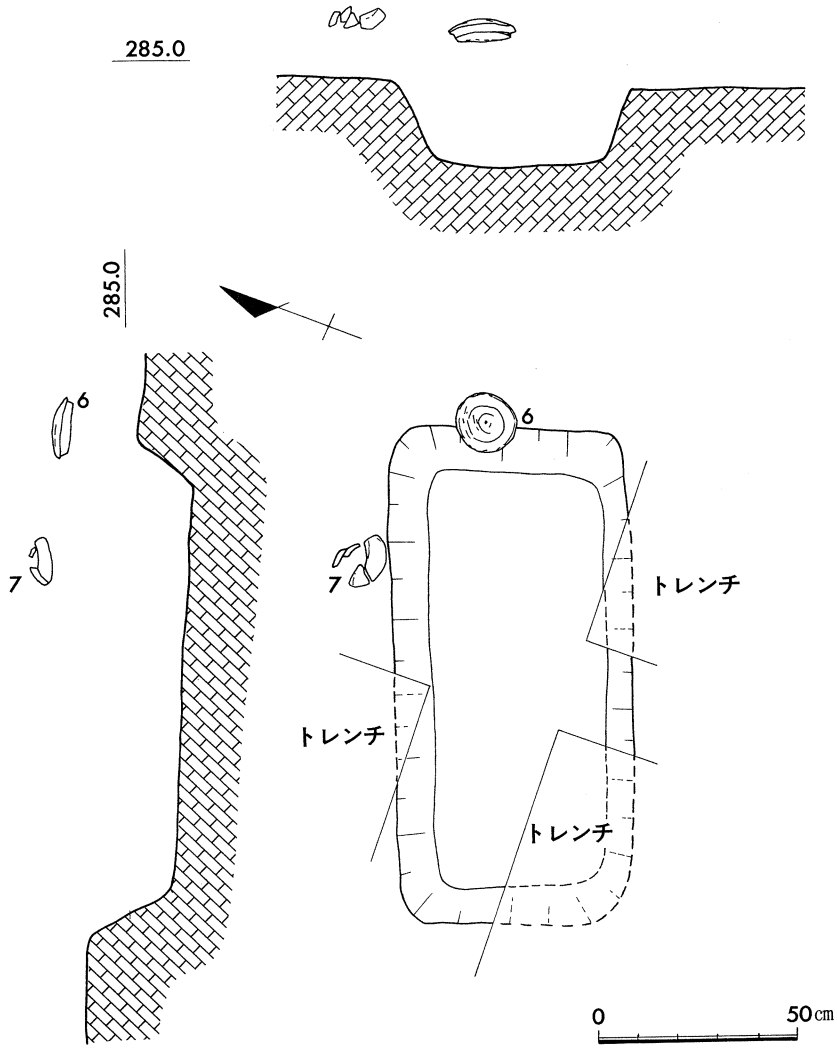
4．埋葬施設

主体部は墳頂から検出された。試掘調査時に設定した十字の畦のちょうど交点下から検出されたもので、トレンチが食い込み一部を欠いている。表土を除去した時点でプランを検出したことから盛土は無かったものと推定される。墓壙は表土直下から掘り込んでおり、地山までは達していない。規模は、長さ1,25m、幅0,6m、深さ0,2mを測る小型の墓壙である。墓壙の床面は平坦で緩やかに東に傾斜している。頭位を



第20図　29号墳墳丘縦・横断土層実測図

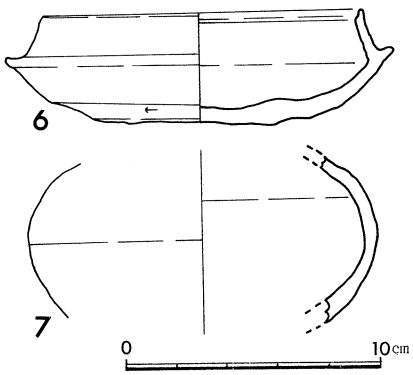
示す枕石等は検出しなかったが、畦の除去作業中表土の中から須恵器坏身1点と、土師器壷片が出土した。このことから、頭位は、東側と考えたほうがよいであろう。主軸は、N－70°－Eである。



第21図　29号墳主体部実測図

a　出土遺物

6は須恵器坏身（第22図・図版41－6）で、器高4,4cm、口径12,6cmを測る。胎土は3mm大の石英を多く含むが密であり、色調は外面は淡青灰色、内面は暗青灰色で、焼成は良好である。口縁には、内傾するしっかりしたかえりを有しており、口縁端部にはやや内傾した段が認められる。調整は、外面底部に右回転の回転ヘラ削りを施し、内面底部はナデ、他は回転ナデである。7は土師器壷（第22図・図版41－7）で復元胴径は14,0cmを測る。胎土は1mm大の石英を含みやや粗い。内・外面に赤色顔料が塗布されている。

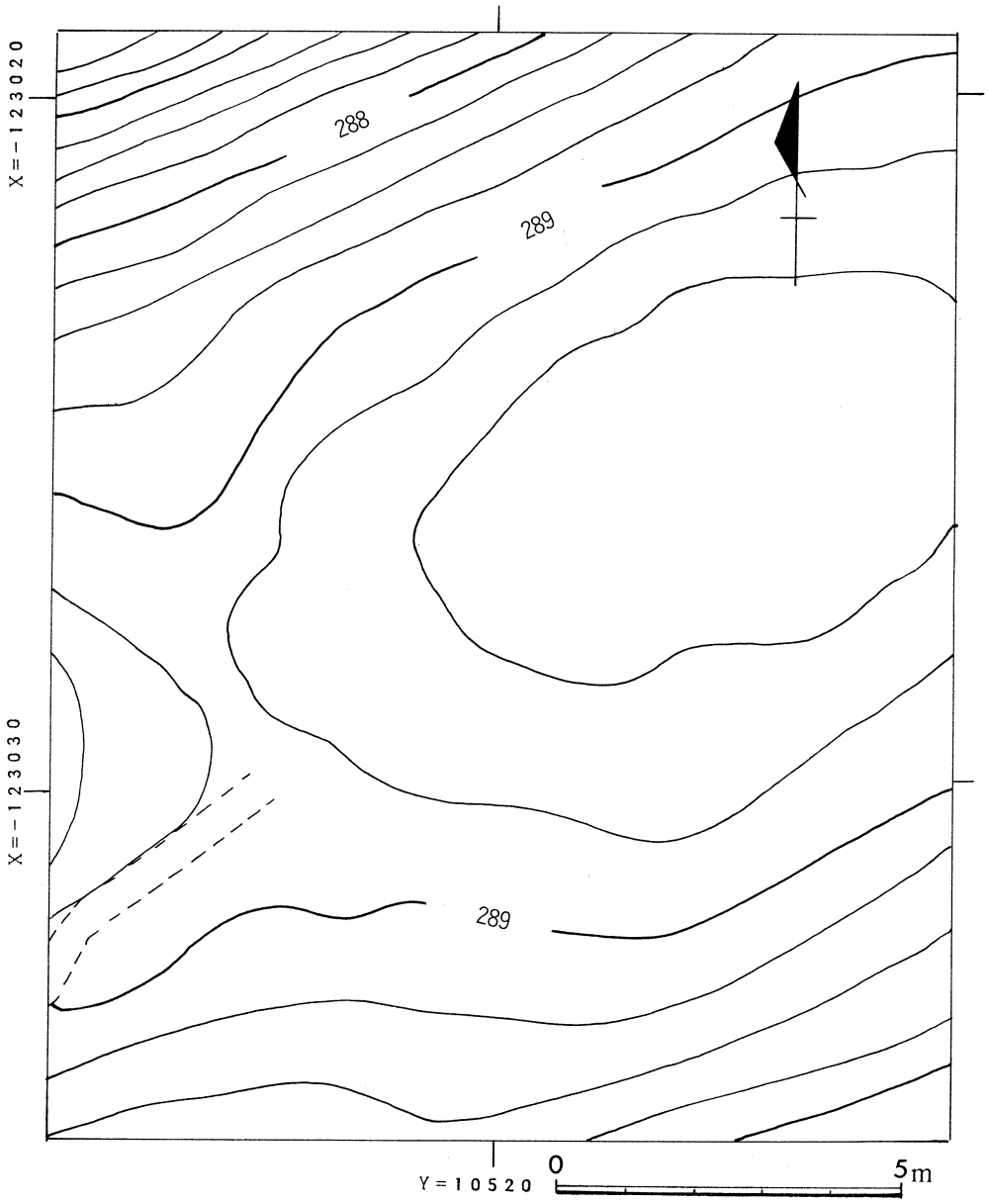


第22図　29号墳出土土器実測図

第４節　30号墳の調査

１．調査前の状況

30号墳は、平成２年の試掘調査で発見されたもので、この丘陵頂部では比較的比高差の無い緩やかな平坦面が続いており、12号墳の東側８ｍに位置する。築造当時墳丘を形成した盛土は流失したものと推定され、表土を除去した時点で蓋石の無い石棺が検出された。また、石棺の

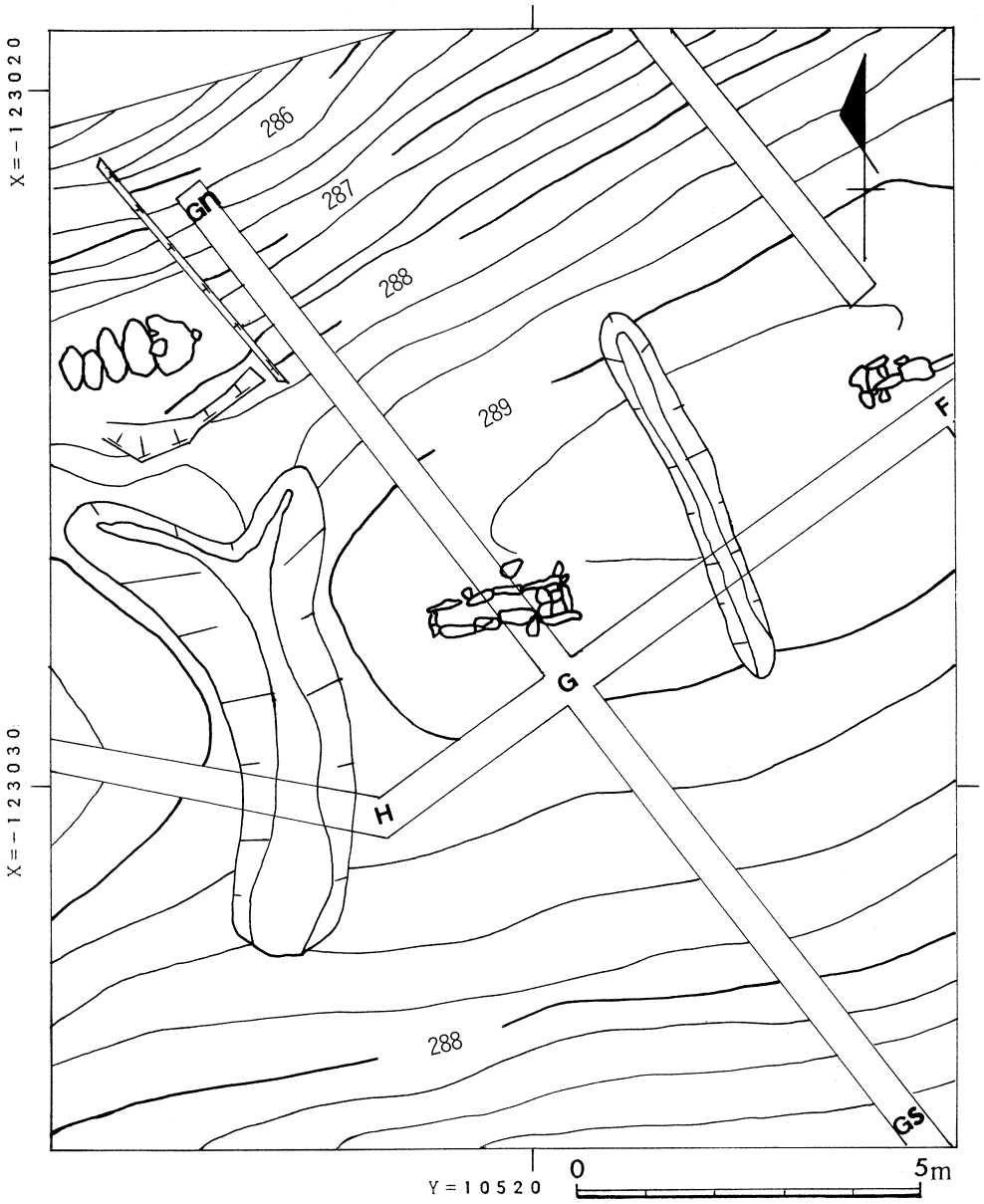


第23図　30号墳調査前の墳丘

東側2,5mには周溝も検出された。これから推定すると、墳形は直径約５ｍの規模を有する方墳であると思われた。

２．墳　　丘

30号墳の墳丘上には、基準杭Ｇを設置した。平成２年の試掘調査のトレンチの軸に合わせ、土層観察用の畦を残し、丘陵縦断方向のＦ－Ｇ，Ｇ－Ｈと、直交するＧ－Ｇｎ，Ｇ－Ｇｓとし

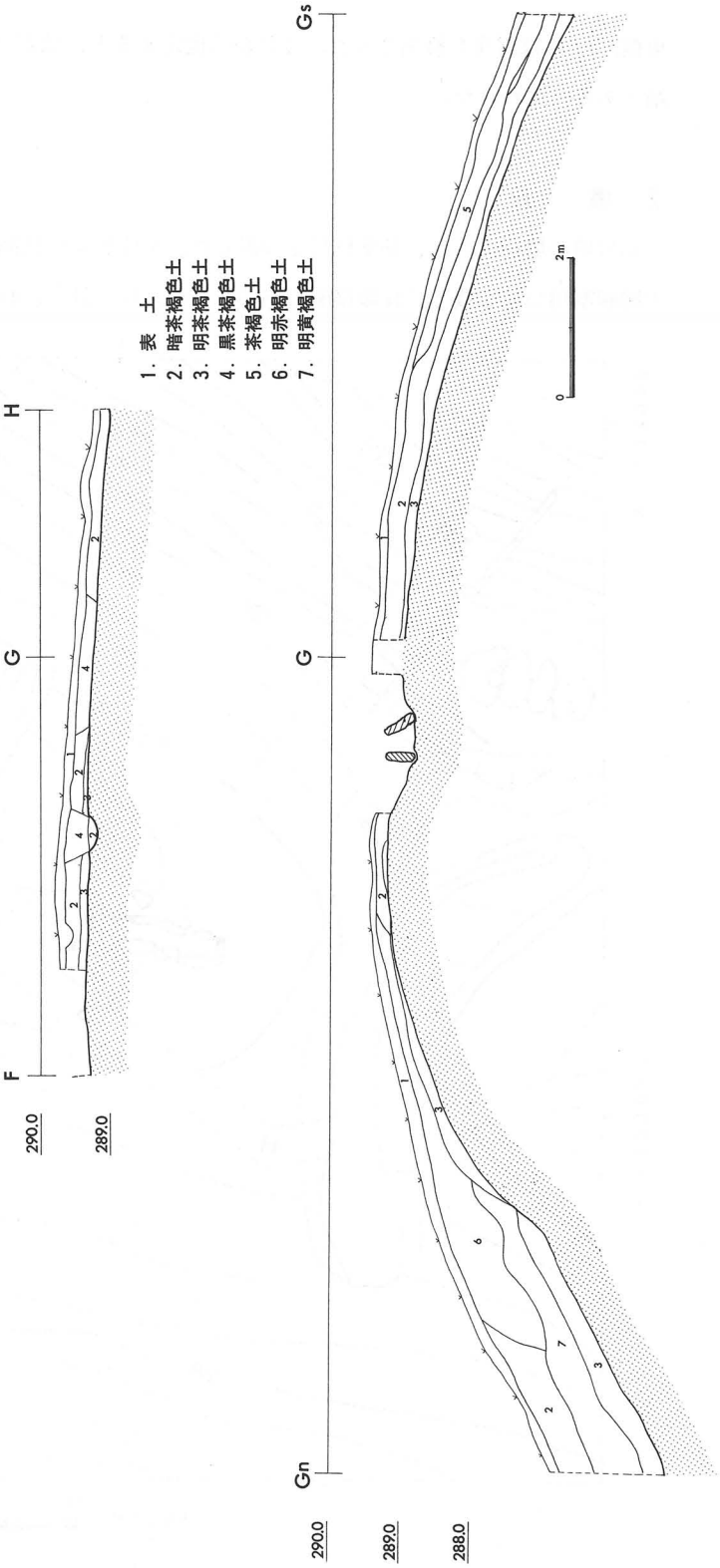


第24図　30号墳調査後の墳丘

た。表土直下に箱式石棺が位置していることから、盛土はすでに流失したか、あるいは、地山を掘り込み主体部を構築した後に埋め土を施した程度の簡易な築造方法であったものと考えられる。G－Gn，G－Gsの土層を観察しても盛土の形跡は確認できず、南北方向の墳端は明確でない。東西方向について墳丘規模を推定する手がかりとして、主体部東側2,5mに周溝を検出した。さらに西側12号墳側2,5mにも周溝があり、これを墳端部と考えるならば、東西5mの規模を有する方墳であると推定できる。

3．周　　溝

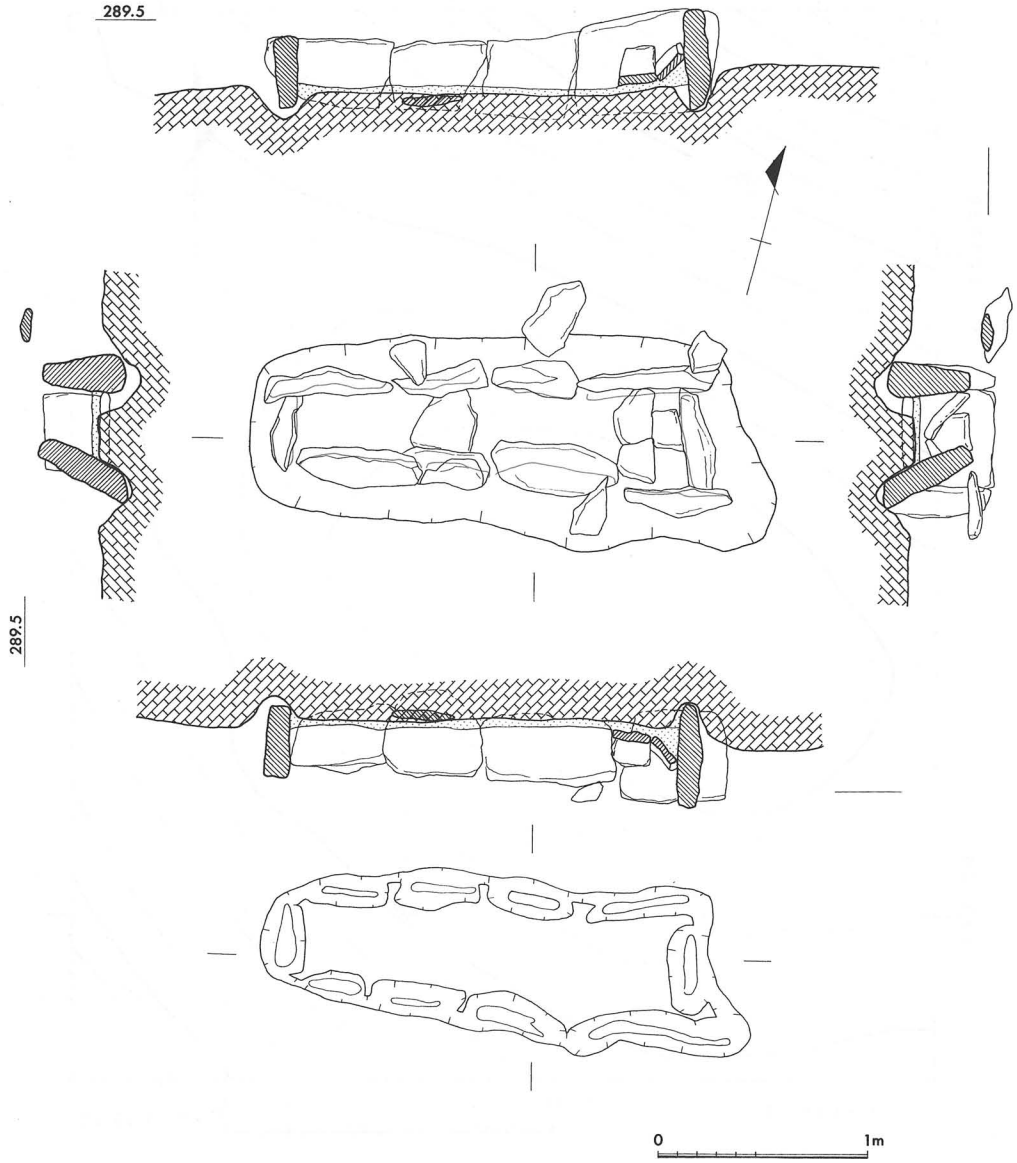
周溝は墳丘の東側、31号墳の墳端に接して掘られている。31 ,32号墳の周溝とは異なり、幅は狭く、地山への掘り込みが深い。幅は0,7mで深さは0,5mを測る。長さは5,5mで、やや主体部側に湾曲しており、両端はしだいに浅く不明瞭となりながら消滅する。周溝内からの遺物は全く出土しなかった。



第25図　30号墳墳丘縦・横断土層実測図

4．埋葬施設

30号墳の埋葬主体部は、試掘調査時に表土を除去したところ、蓋石を持ち去られた状態の箱式石棺を検出した。盗掘を受けた石棺内部には腐葉土や木の根で塞がれていた。トレンチにかかっていたため石棺を検出する際、地表面での掘り方プランは明らかにはできなかったが、石棺底部で長さ2,6m、幅は0,7～1,0mのほぼ隅丸長方形のプランを検出した。石棺の規模は、内法で長さ1,85m、幅0,45m、深さ0,35mを測る。主軸は、N－７５°－Eである。内部を精査すると、棺東側から３枚の石を組み合わせた枕石が検出され、棺中央よりやや足部寄りからは１枚の板状の敷石も検出した。しかし、年代を示す手がかりとなる遺物や副葬品は出土しなかった。

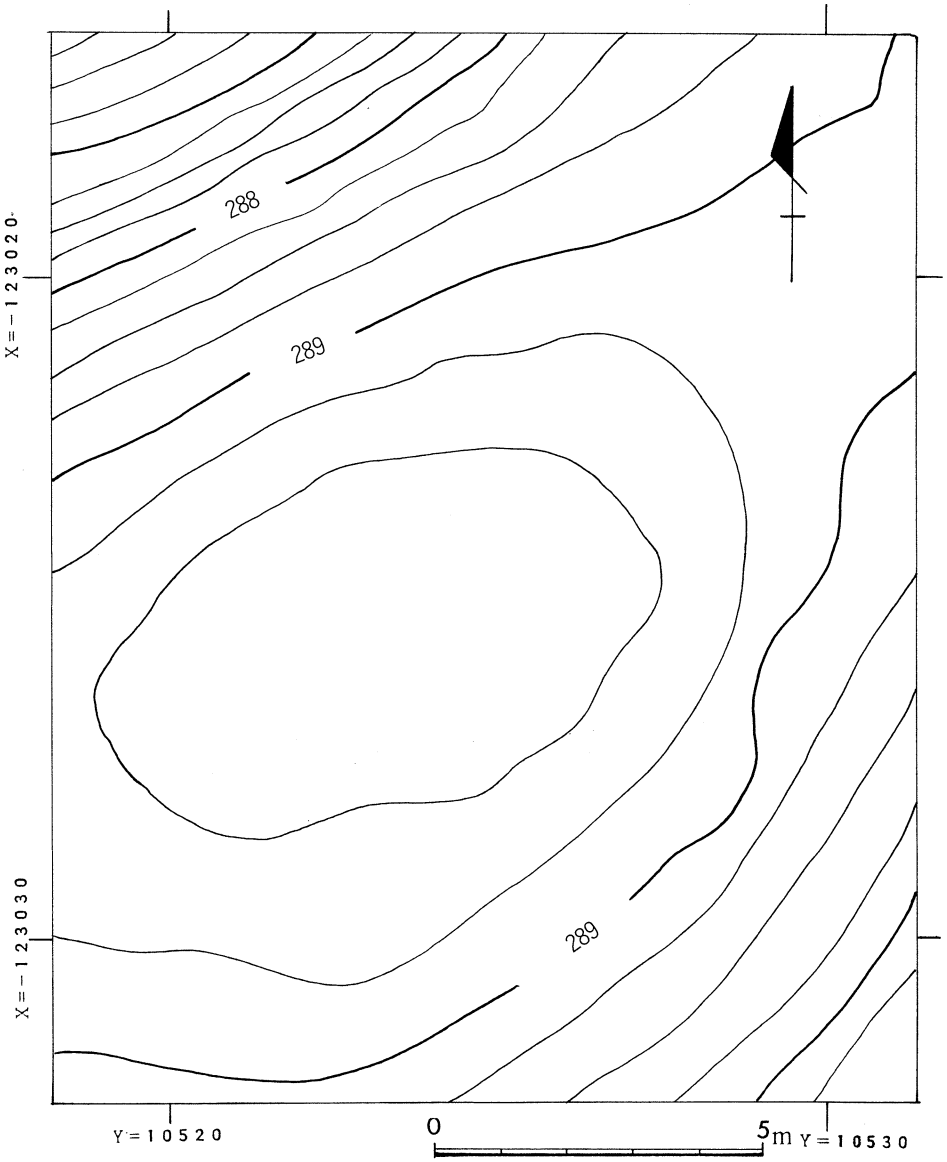


第26図　30号墳主体部実測図

第５章　31号墳の調査

１．調査前の状況

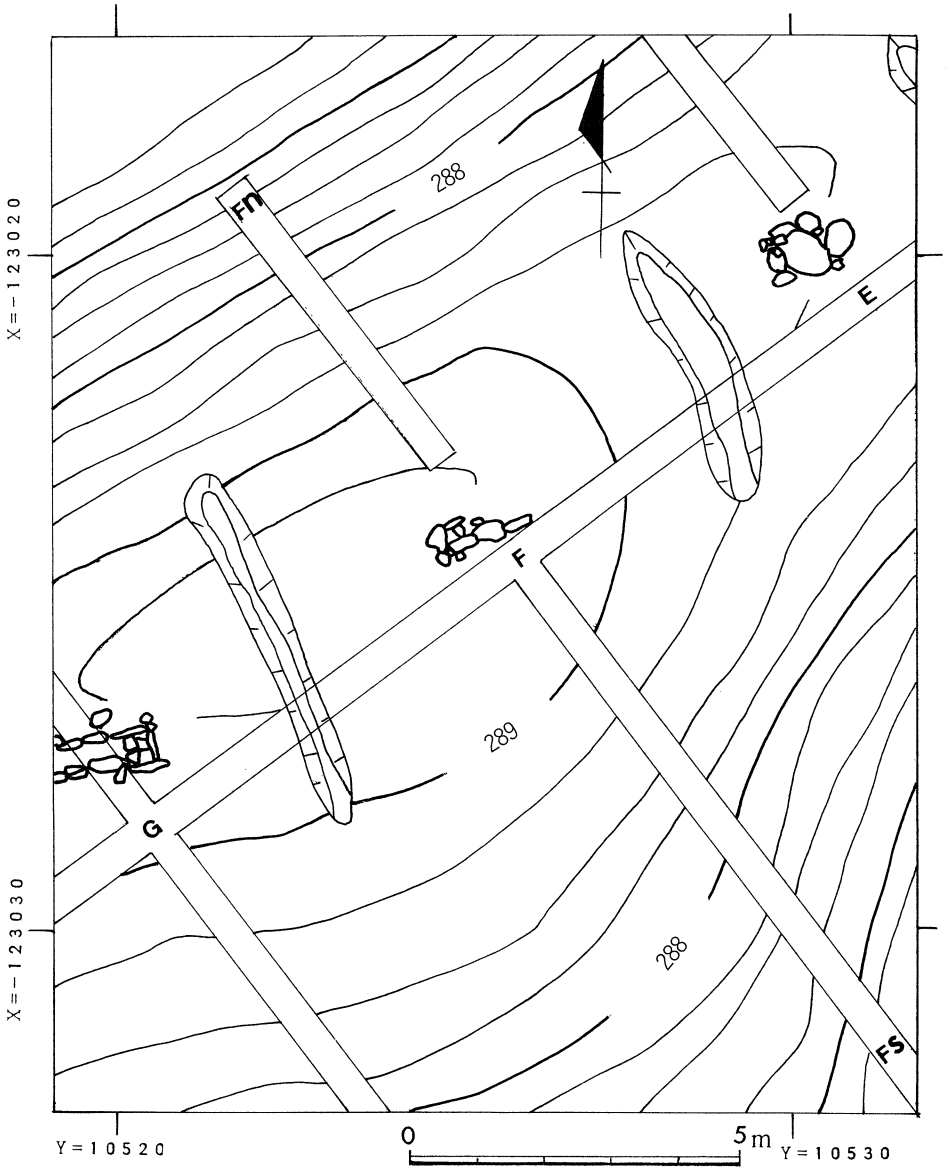
31号墳は、30号墳からさらに東側６ｍに位置し、平成２年の試掘調査で発見されたものである。30号墳と同様に形成していたと測される盛土は流失したものと推定され、墳端は明確ではないが東側２ｍに周溝を検出しており、墳形は不明だが直径約４ｍ程度の古墳であったと推定された。埋葬施設は箱式石棺で、表土直下から蓋石と側石の一部を抜き取られた状態で検出された。



第27図　31号墳調査前の墳丘

2．墳　　丘

31号墳の墳丘上には、基準杭Ｆを設置した。平成２年の試掘調査のトレンチの軸に合わせ、土層観察用の畦を残し、丘陵縦断方向のＥ－Ｆ，Ｆ－Ｇと、それに直交するＦ－Ｆｎ，Ｆ－Ｆｓとした。表土直下に箱式石棺が位置していることから、盛土はすでに流失したか、あるいは地山を掘り込み主体部を構築した後に埋め土を施した程度の、簡易な築造方法であったものと考えられる。Ｆ－Ｆｎ，Ｆ－Ｆｓの土層を観察しても盛土の形跡は確認できず、南北方向の墳端は明確でない。東西方向について墳丘規模を推定する手がかりとして、主体部東側３ｍに

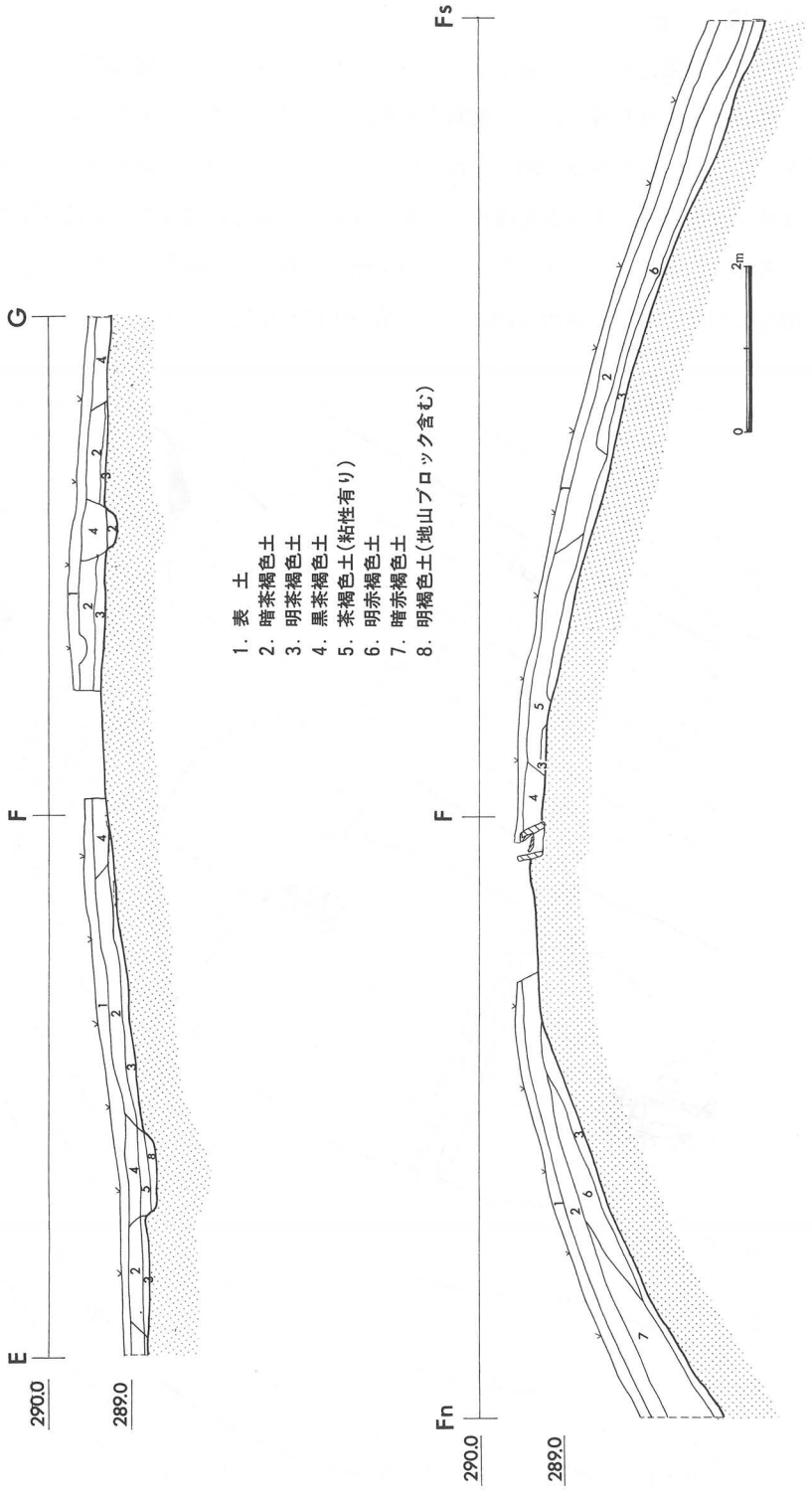


第28図　31号墳調査後の墳丘

周溝を検出した。さらに西側30号墳側の両者を区画するために掘られた周溝を墳端部と考えるならば、東西７ｍの規模を有する方墳であると推定できる。

３．周　　溝

周溝は古墳の東側、32号墳の墳端に接して掘られている。31号墳と比較し、幅はやや広く、地山への掘り込みは浅い。幅は0,9mで深さは0,5mを測る。長さは4,5mで、やや主体部側に湾曲しており、両端はしだいに浅く不明瞭となりながら消滅する。周溝内からの遺物は全く出土しなかった。

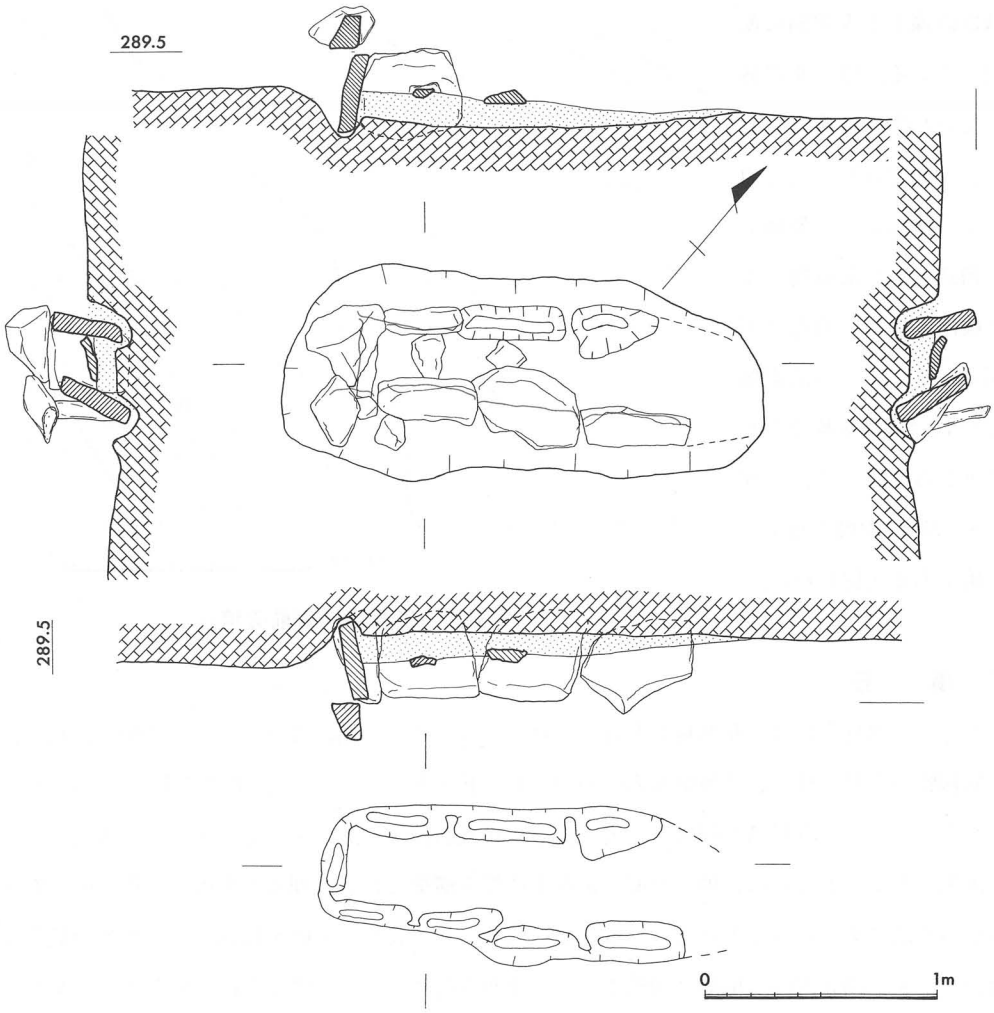


第29図　31号墳墳丘縦・横断土層実測図

4．埋葬施設

31号墳の主体部は、試掘調査時に表土を除去したところ、蓋石と側壁の一部と東側奥側壁が抜き取られた状態の箱式石棺を検出した。主軸はN－５０°－Eである。表土直下での掘り方の平面プランは不明であるが、F－Fｓの土層図では埋め土を施した形跡があり、左右対象と仮定するならば、南北方向の掘り方は約２ｍであったと推定される。

埋葬施設の規模は、残存する側壁の内法で幅0,3m、深さは0,3mを測る。長さについては東側奥側壁の抜石跡が検出できず不明である。内部からは、西側棺底から２枚の板状の石材を検出したが、流動している可能性もあり、形状からしても敷石とは考えにくい。

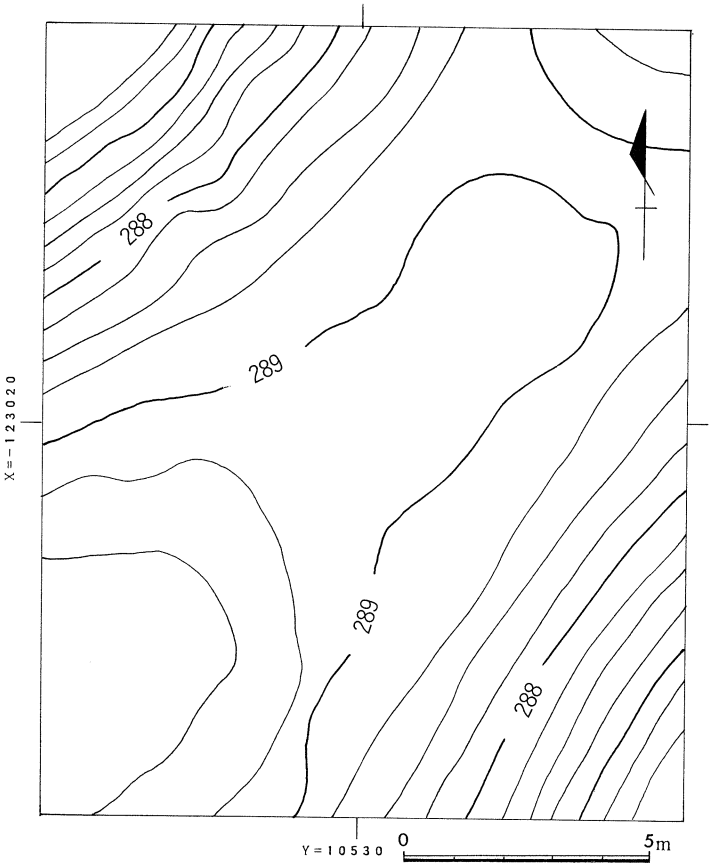


第30図　31号墳主体部実測図

第６節　32号墳の調査

１．調査前の状況

32号墳は、平成２年度の試掘調査で発見されたもので、31号墳から東側に６ｍで、30・31号墳との比高差の殆ど無い丘陵尾根部の平坦面に位置し、ほぼ直線上で等間隔に配列している。墳丘を形成していた盛土は流失したものと推定され、表土直下から蓋石２枚を架構した箱式石棺が未盗掘のまま検出された。墳形は不明であるが、主体部東側2,0mには周溝を検出したことから推定して、直径４～4,5mの規模を有する古墳であると思われた。



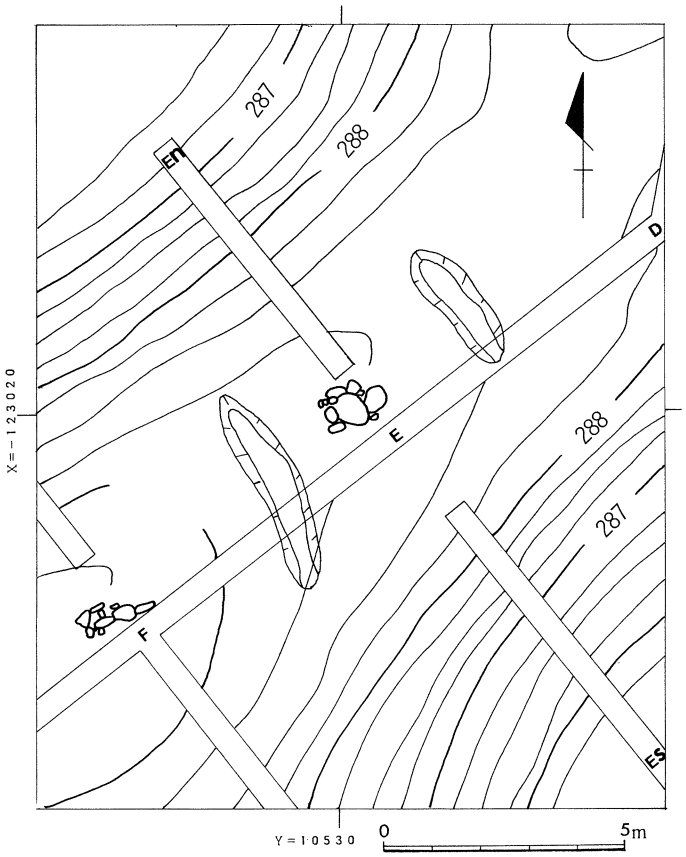
第31図　32号墳調査前の墳丘

２．墳　　丘

32号墳の墳丘上には、基準杭Ｅを設置した。平成２年の試掘調査のトレンチの軸に合わせ、土層観察用の畦を残し、丘陵縦断方向のＤ－Ｅ，Ｅ－Ｆと、それに直交するＥ－Ｅｎ，Ｅ－Ｅｓとした。30、31号墳と同様に、表土直下に箱式石棺が位置していることから、盛土はすでに流失したか、あるいは、地山を掘り込み主体部を構築した後に埋め土を施した程度の、簡易な築造方法であったものと考えられる。Ｅ－Ｅｎ，Ｅ－Ｅｓの土層を観察しても盛土の形跡は確認できず、南北方向の墳端は明確でない。東西方向について、墳丘規模を推定する手がかりとして、主体部東側1,7mに周溝を検出した。さらに西側31号墳側の両者を区画するために掘られた周溝を墳端部と考えるならば、東西約４ｍの規模を有する方墳であると推定される。

3．周　溝

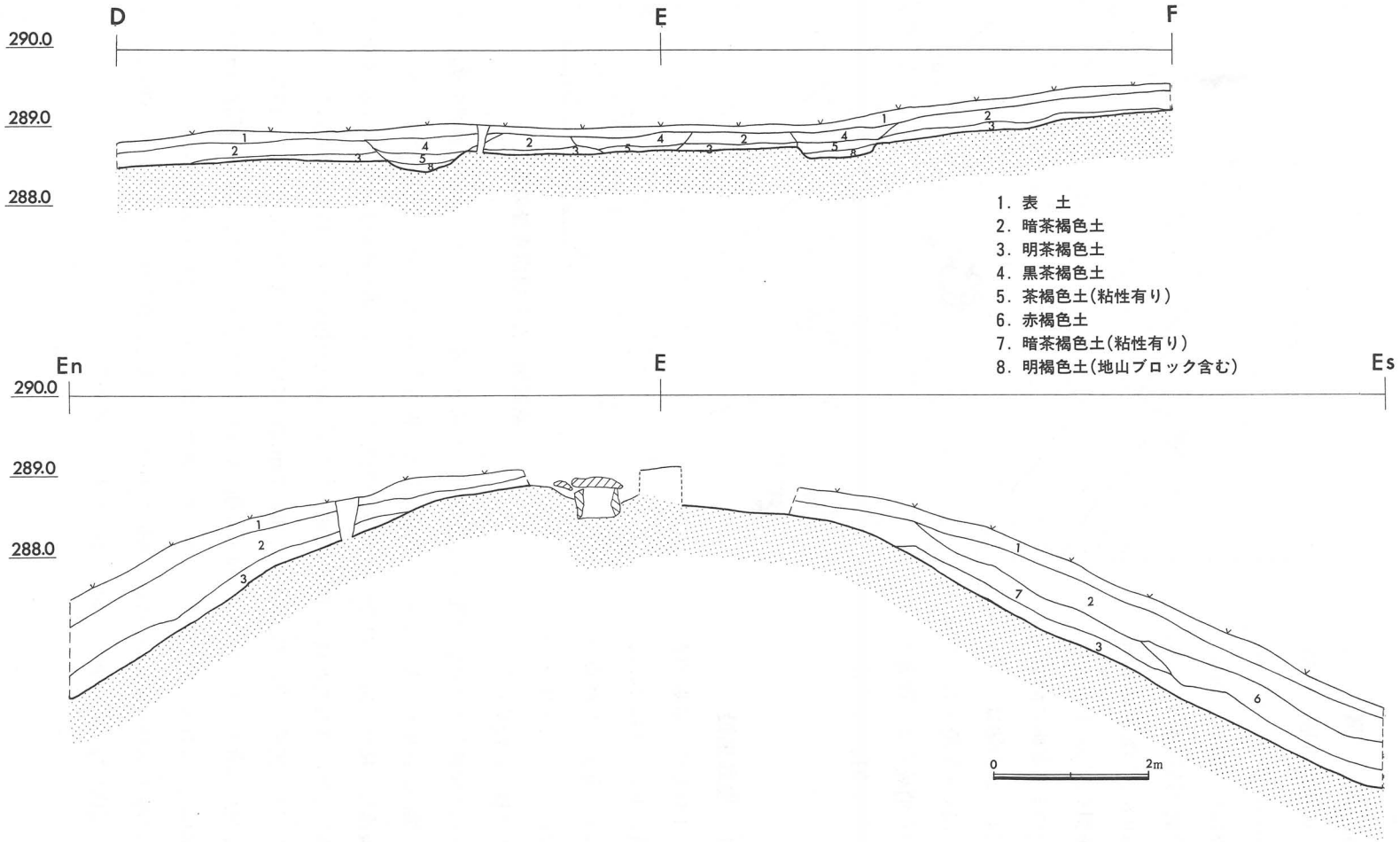
周溝は古墳の東側、1,7mに掘られている。幅はやや広く、地山への掘り込みは浅い。幅は0,8mで深さは0,5mを測る。長さは2,7mで、やや主体部側に湾曲しており、両端はしだいに浅く不明瞭となりながら消滅する。周溝内からの遺物は全く出土しなかった。



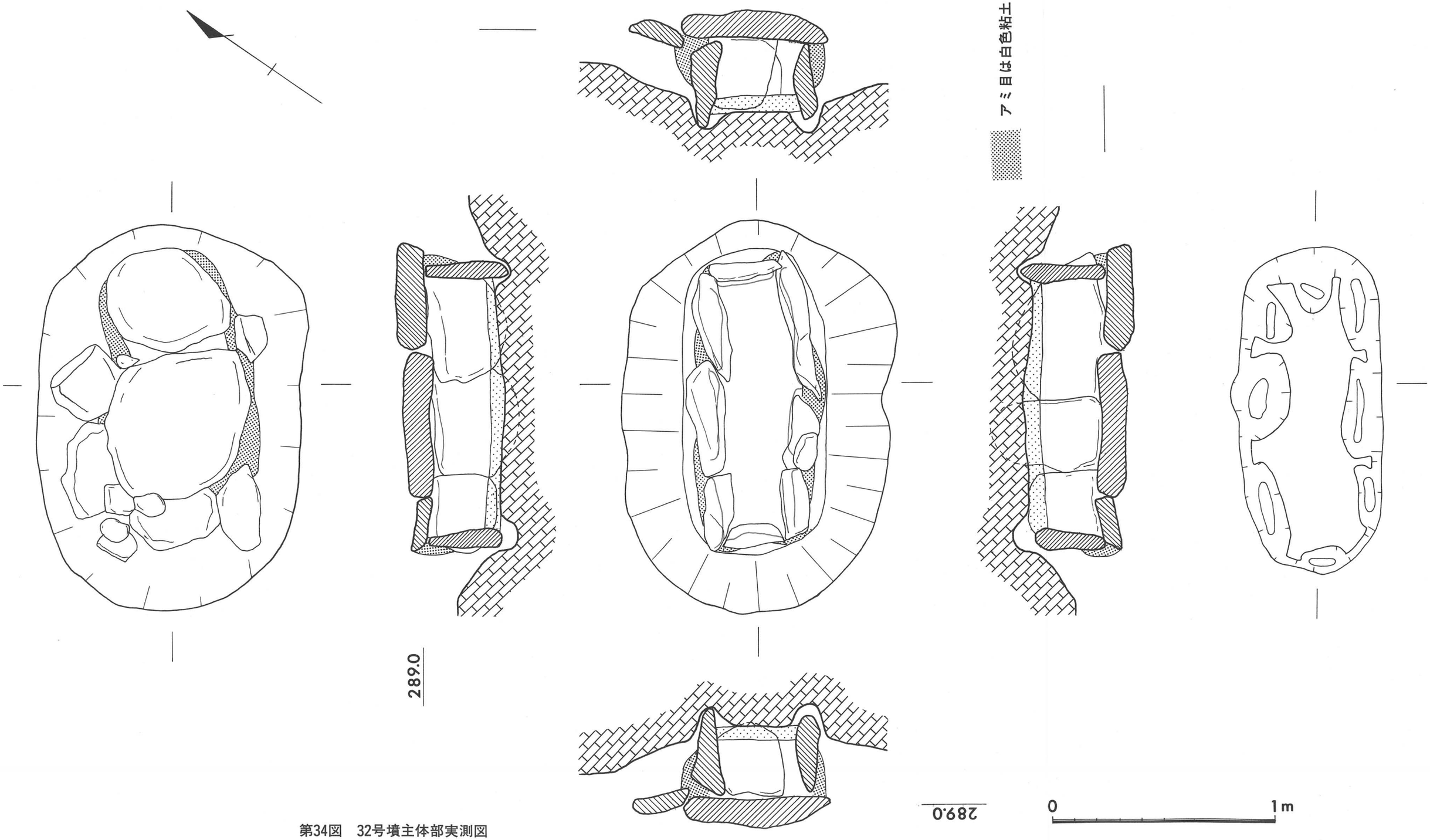
第32図　32号墳調査後の墳丘

4．埋葬施設

主体部は、試掘調査時のトレンチ掘りの際、表土を除去した時点で検出した。大・中・小の３枚の比較的小型の蓋石を架構してあり、目地には白色粘土で目張りが施してあった。蓋石の輪郭を検出した時点で地山が露出し、掘り方プランを検出した。掘り方は石棺の形状に合わせ小さく掘られており、規模は、長さ1,8m、幅1,2mで、隅丸方形を呈している。蓋石を除去すると、地山を掘り込み、板状に加工された８枚の自然石を並べた小型の箱式石棺が検出された。主軸はＮ－５５°－Ｅを示す。規模は内法で長さ1,1m、幅0,35m、深さは、棺底部まで0,25mを測る。内部には石材の隙間から流入したと思われる粒子の細かい土砂が入り込んでおり、注意深く精査を行ったが、副葬品、人骨等は全く出土しなかった。また、頭位を示す枕石も検出しなかった。しかし、石棺の幅が東側0,35mなのに対し西側では0,25m と狭く、台形状となっており、他の12、30号墳と同様に幅の広い東側が頭位であったものと考えられる。



第33図　32号墳墳丘縦・横断土層実測図



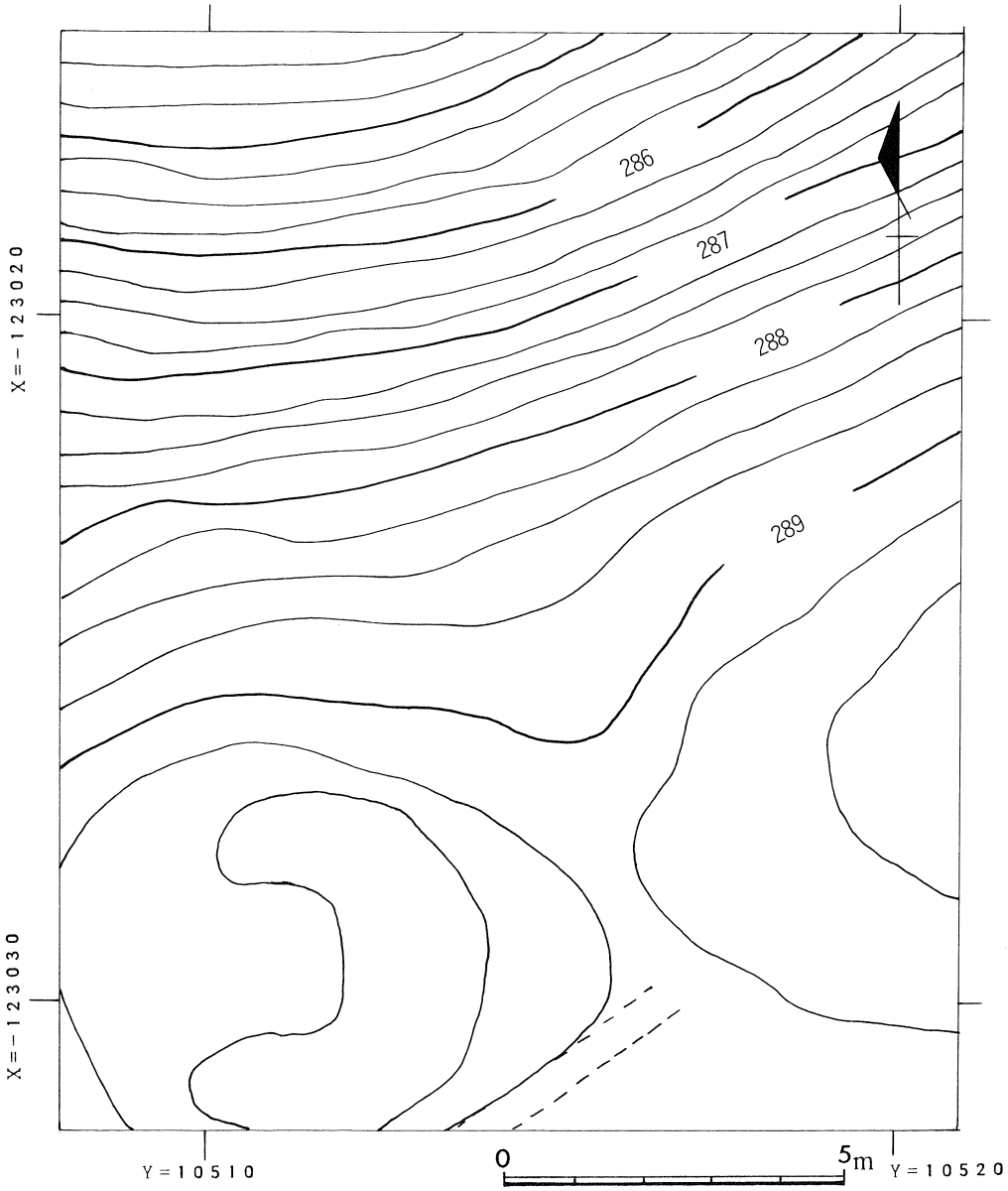
第34図　32号墳主体部実測図

第７節　33号墳の調査

１．調査前の状況

33号墳は、今回の発掘調査で発見されたもので、12号墳の北側５ｍに位置する。

この場所は、この丘陵の中では比較的斜面が急であり、調査前の観察でも墳丘状の張り出しなどは確認しなかった。ところが発掘を開始し、表土を除去したころ未盗掘の箱式石棺を検出

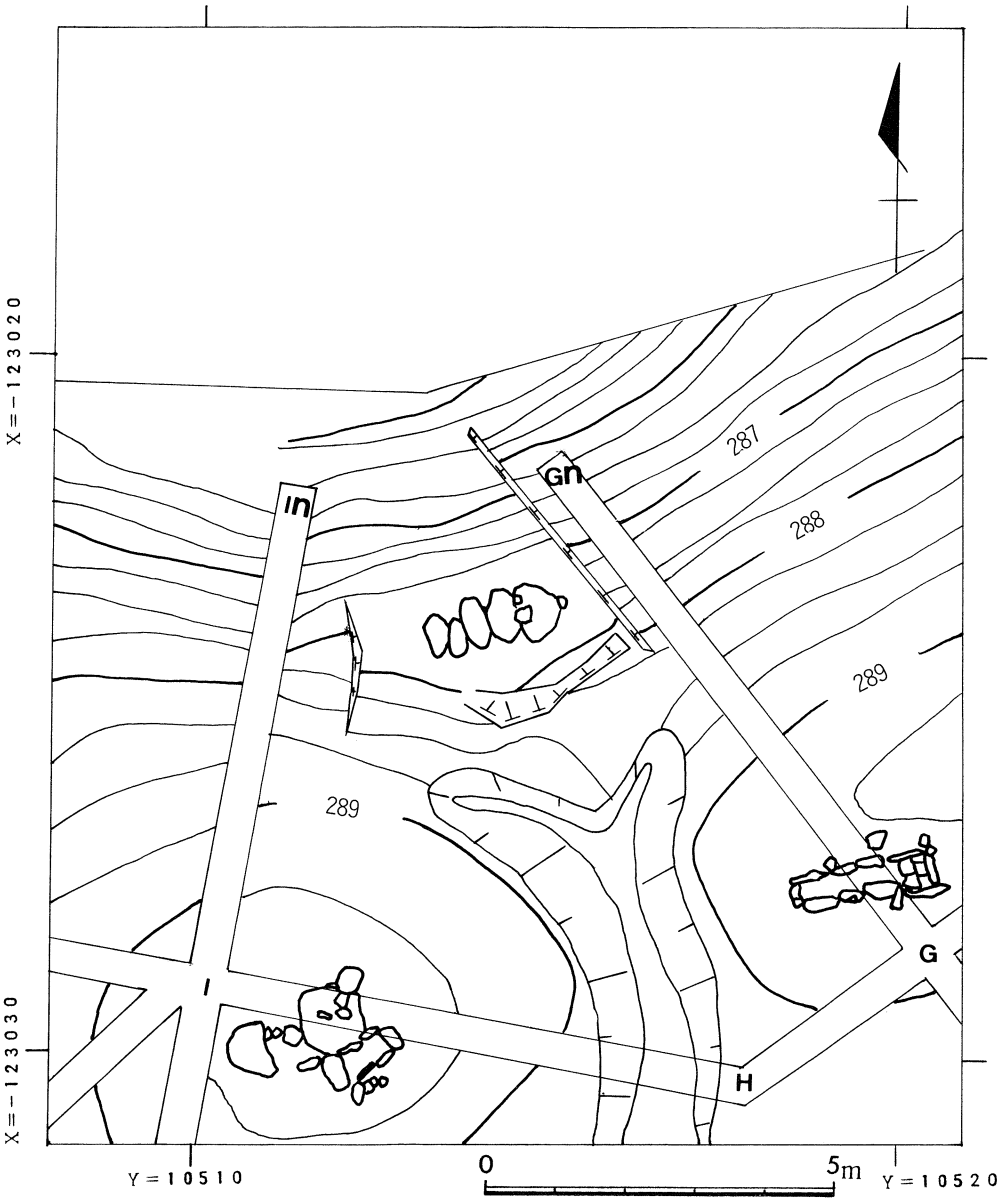


第35図　33号墳調査前の墳丘

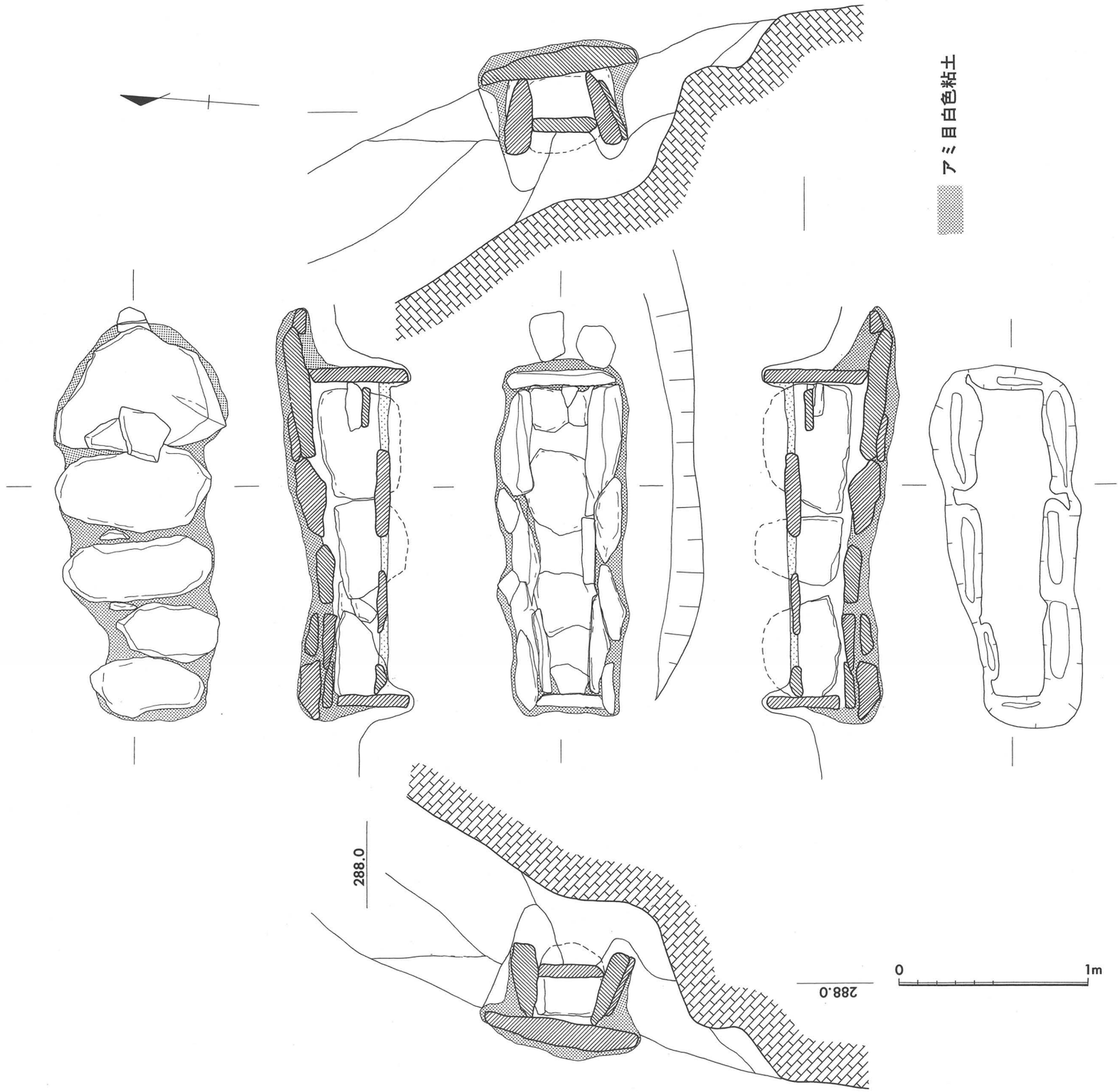
し、32号墳と称した。12号墳との比高差は1,5mである。

2．墳　　丘

平成２年の試掘調査時には確認されていなかったので、発掘調査に先だっての基準点や土層観察用の畦は設定していない。蓋石を検出した時点で南北方向に主軸を定め、12号墳墳頂付近



第36図　33号墳調査後の墳丘



第37図　33号墳主体部実測図

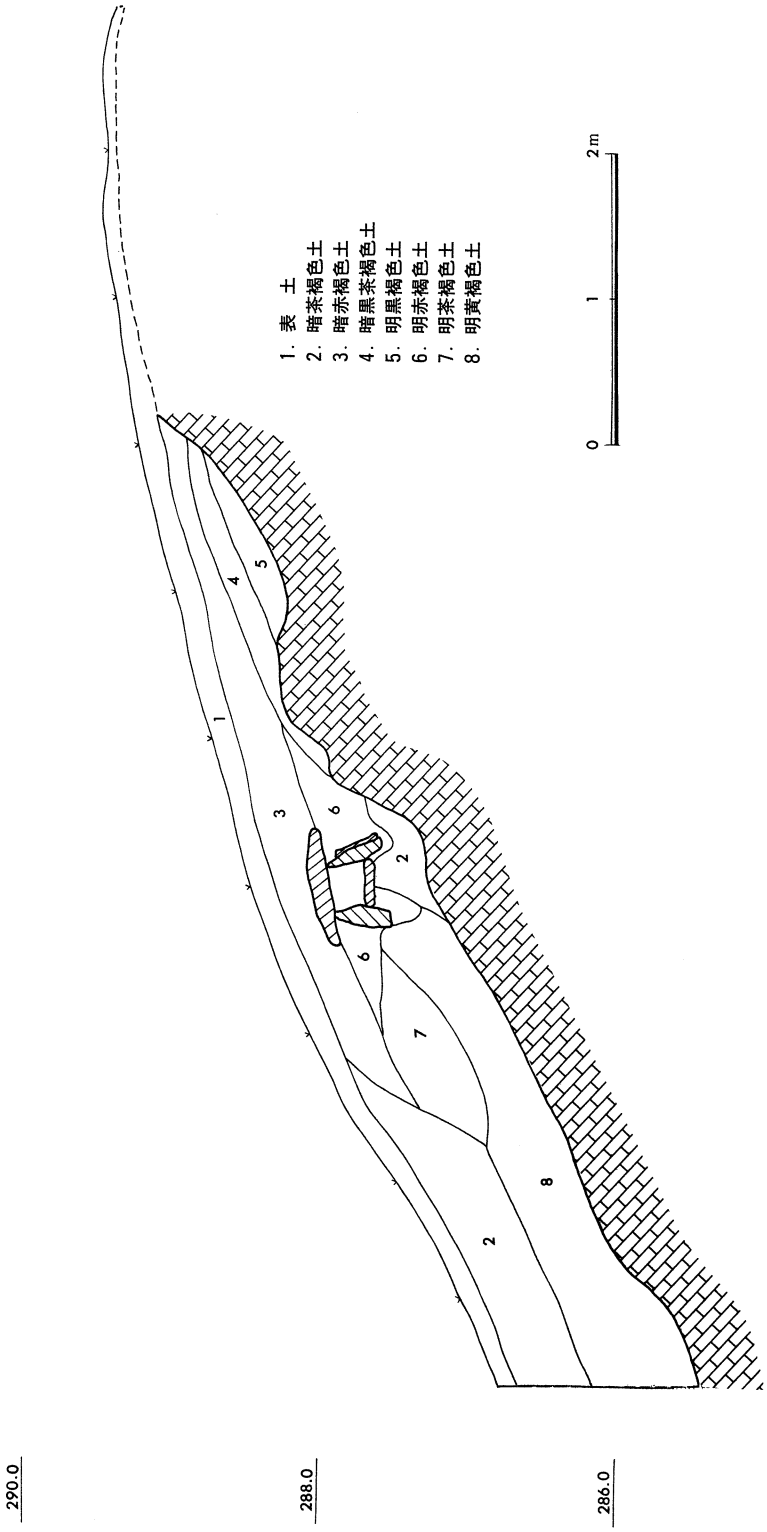
から調査範囲端までの土層を観察した。立地が斜面のため盛土はほとんど流失したものと思われたが、表土下に暗赤褐色土が推積しているのを確認した。12号墳の盛土と区別が付きにくいため不明確ではあるが、主体部北側では下方へ落ち込み、土層の変化が認められた。また、北側にも12・30号墳が相互に切り合ったものと想定した周溝があり、これらを墳端としたならば、南北約3mの規模を有する方墳と考えられる。

3．周　　溝

主体部上方約1,5mに周溝を検出したが、前述した通りその切り合い前後関係については、不明である。

4．埋葬施設

主体部は、12号墳の北東側6mの急斜面の表土を除去した時点で検出した。蓋石は、表面では5枚が架構されており、白色粘土で全面に目張りを



第38図　33号墳墳丘横断土層実測図

施されていた。掘り方は、主体部南側に地山を段状に掘り込んだと思われる痕跡が長さ約2mに渡り確認できる。しかし、主体部は地山を掘り込み地山に差し込む様に棺を構築していない点で、他の古墳の埋葬施設とは異なる。斜面を利用し、地山を切削り整地し、盛土の後に石棺を据えたものと考えられる。蓋石は、西側では板状の石材を２重に組み合わせた構造となっており、計７枚の蓋石が架構されていることが判明した。蓋石を除去し側壁を検出した。主軸は、Ｎ－８５°－Ｅを示す。

側壁は板状の石材を交互に組み合わせた２重構造となっており、東側奥側壁は側壁端を塞ぐ形状となっており、一方西側奥側壁は、両側壁で挟み込む形状となっている。規模は内法で、長さ1,65m、幅は東側0,35m、西側0,20mで、深さは0,25m を測る。石棺内部には、粒子の細かい砂質の土砂が少量入っていたが、粘土に被われていたため内部は空洞となっていた。しかし、当時を窺う資料となる副葬品や人骨は出土しなかった。

東側端には３枚の板石を組み合わせた枕石があり、頭位は東であったと断定でき、又棺底部には３枚の板状の敷石が敷かれていた。

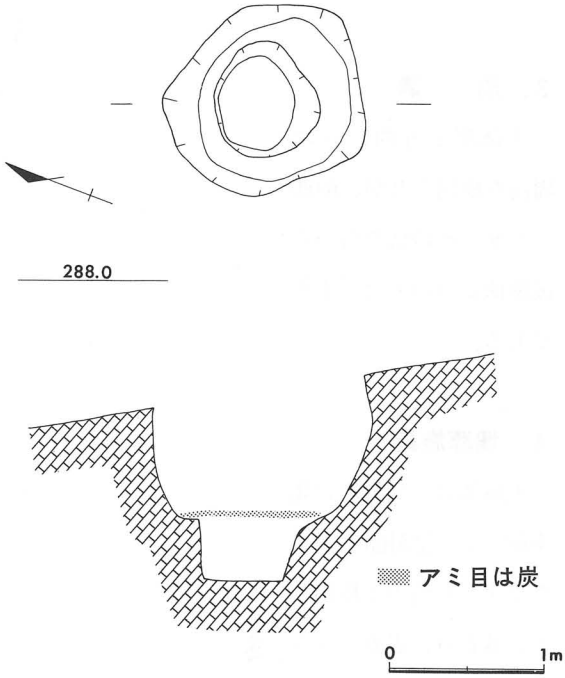
第８節　その他の遺構

１．１号土壙

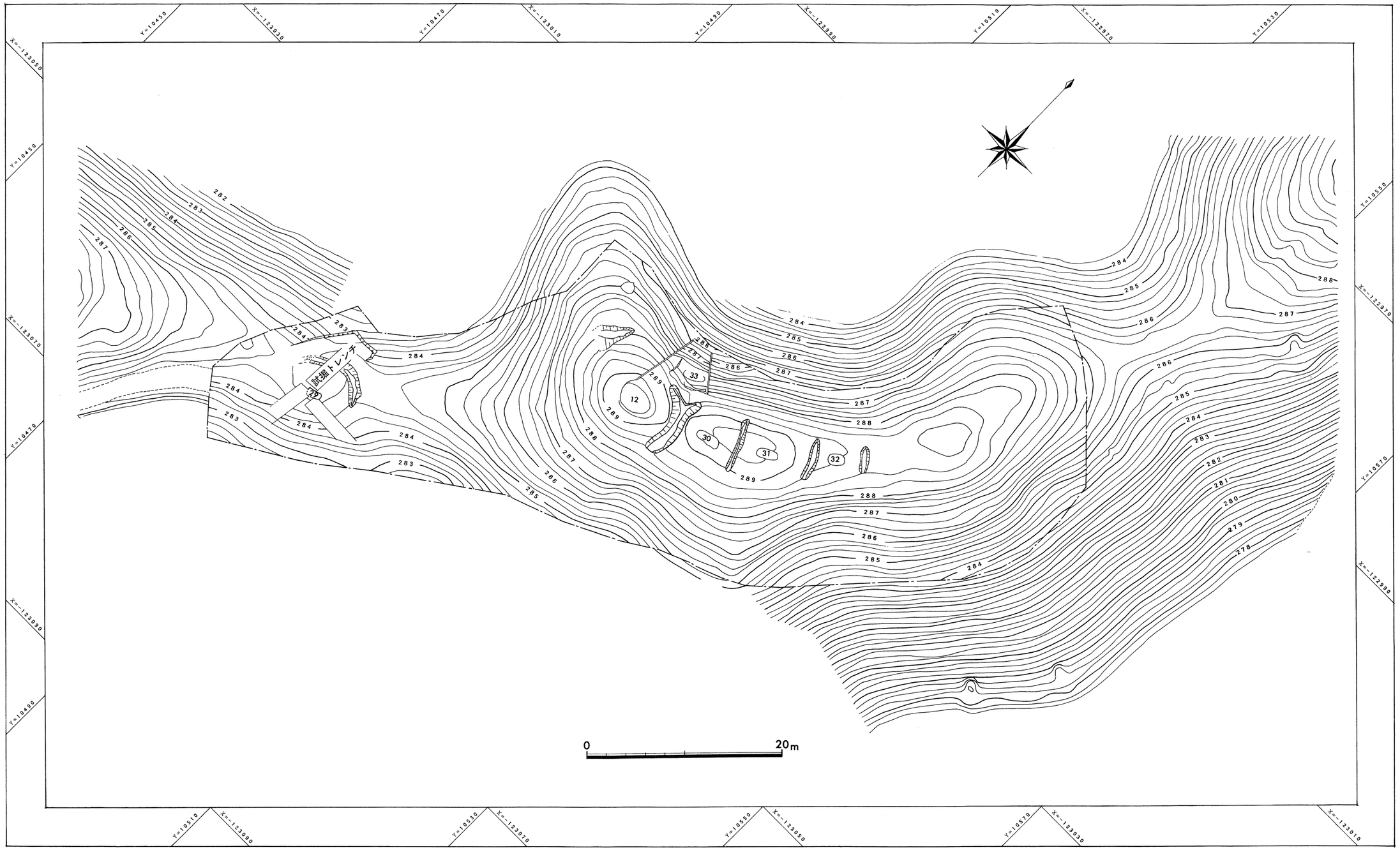
その他の遺構とは、古墳群の位置する尾根上の調査区内から検出された遺構で墳墓以外のものである。

１号土壙は12号墳の西側周溝のさらに西の緩やかな斜面に位置し、表土下で検出された。

土壙の平面形は略円形を呈し、南北1,22m東西1,34mを測る。床面は平坦で、中央には径60cmのピットがあり、ピット上の床面からは炭を検出した。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。出土遺物は何も確認しなかった。性格については不明である。



第39図　１号土壙



第40図　山ノ内古墳群調査後地形図

第Ⅴ章　　周辺部の調査

ここでは、今回の山ノ内古墳群発掘調査に先立ち実施した、平成２年度の試掘調査で確認され、協議により開発区域から除外することになった山ノ内34・35・36号墳について概要を紹介する。

山ノ内34・35・36号墳は、29号墳からさらに西側の緩やかな丘陵の東側の斜面に位置し、南側30mには平成２年度に開発工事中に発見され調査を行った28号墳、西側40mには既周知の10号墳が位置する。

立木伐採後に３段の階段状に形成された墳丘状のマウンドを確認したため、幅２mのトレンチを尾根の縦断方向に設定し確認調査を実施した。トレンチは、マウンドの中心を外し、それぞれの墳丘の頂部に幅50cmの畦を残すよう設定した。

トレンチの名称は、試掘調査時に全調査範囲をＡ～Ｅ区に分け、それぞれのトレンチに１・２・３…と番号を付け、Ｅ区については、尾根の頂部からＥ－１，Ｅ－２，Ｅ－３，Ｅ－４とした。

調査は尾根裾部のＥ－４から順次行い、Ｅ－３，Ｅ－２，Ｅ－１から遺構を検出したため、発見順に便宜状34・35・36号墳と称することにした。それぞれについて結果を述べることにする。

１．34号墳の調査

表土は10cm程度と薄く、これを除去し精査を行った。その結果埋葬主体部の掘り方プランの一部と周溝を検出した。掘り方はトレンチ東端から検出し、さらに西側60cmで幅２mの周溝を検出した。墳丘を形成する盛土は流失しており、周溝との間隔から判断して規模は、径４～６mの小型の方墳であると推定される。

埋葬部の内部構造については未調査のため不明であるが、周溝内からは３組６点の須恵器坏蓋身と２点の須恵器坏身がほぼ完形で出土した。

また、トレンチ西側端には35号墳の主体部の一部と思われるプランを検出した。

a　周溝内出土遺物

８は須恵器坏蓋（第41図・図版48－８）で、器高4,7cm,口径15,0cmを測る。胎土は１mm大の石英を若干含むが密であり、色調は淡灰色で、焼成は良好である。頂部はほぼ平らで、口縁部は、やや内傾して下り、口縁端部は内側に内傾する段があり、外面の頂部との境の稜にも凹状の段が認められる。

調整は、外面頂部は左回転による回転ヘラ削り、他は回転ナデで、内面頂部には同心円状のあて具の圧痕が残る。

9は須恵器坏身（第41図・図版48－9）で、8と1組になるものである。器高5,2cm,口径12,2cmを測る。胎土は2mm大の石英を若干含むが密であり、色調は、外面が淡青灰色、内面は淡灰色で、焼成は良好である。底部は丸みを帯び、口縁には、内傾する高さ1,5cmのかえりを有しており、口唇部は丸みを帯びやや内傾しながら下る。調整は、外面底部は左回転の回転ヘラ削り、他は回転ナデで内面底部には同心円状のあて具の圧痕が残る。

10は須恵器坏蓋（第41図・図版48－10）で、器高5,1cm,口径15,8cmを測る。胎土は1mm大の砂粒を含むが密であり、色調は淡青灰色で、焼成は良好である。頂部はほぼ平らで、口縁部はやや内傾して下り、口縁端部は不明瞭であるが内傾する凹状の段があり、外面の頂部との境の稜にも凹状の段がある。

調整は、外面頂部は左回転の回転ヘラ削り、他は回転ナデで、内面頂部には同心円状のあて具圧痕が残る。

11は須恵器坏身（第41図・図版48－11）で、10と1組になるものである。器高5,3cm,口径13,3cmを測る。胎土は1mm大の石英を含むが密であり、色調は外面は暗灰色、内面は淡青灰色で、焼成は良好である。底部はやや丸みを帯び、口縁には、内傾する高さ1,5cmのかえりを有しており、口縁端部は、内傾する段がある。調整は、外面底部は左回転の回転ヘラ削り、内面底部はナデ、他は回転ナデである。

12は須恵器坏蓋（第41図・図版48－12）で、器高5,1cm,口径14,2cmを測る。胎土は3mm大の石英を若干含むが密であり、色調は暗青灰色で、焼成は良好である。頂部はやや丸みを帯び、口縁部はやや内傾して下り、端部は丸みを帯びる。外面の頂部との境の稜には凹状の段がある。

調整は、外面頂部は右回転の回転ヘラ削り、他は回転ナデで、内面頂部には同心円状のあて具圧痕が残る。

13は須恵器坏身（第41図・図版48－13）で、12と1組になるものである。器高5,1cm,口径11,6cmを測る。胎土は、1mm以下の砂粒を含むが密であり、色調は外面は淡灰色、内面は暗青灰色で、焼成は良好である。底部は丸みを帯び、口縁には、内傾する高さ1,2cmのかえりを有しており、口唇部は丸みを帯び、内傾しながら下る。調整は、外面底部は右回転の回転ヘラ削り、内面底部はナデ、他は回転ナデである。

14は須恵器坏身（第41図・図版48－14）で、器高5,2cm,口径12,9cmを測る。胎土は2mm大の石英を含むが密であり、色調は、外面は淡灰色、内面は淡青灰色で、焼成は良好である。底部はほぼ平らで、口縁にはやや内傾する高さ1,3cm のかえりを有しており、口唇部は丸みを帯び内傾しながら下る。内面底部との境には凹状の段がある。調整は、外面底部は右回転の回

転ヘラ削り、内面底部はナデ他は回転ナデである。

15は須恵器坏身（第41図・図版48－15）で、器高4,0cm,口径11,3cmを測る。胎土は１mm以下の砂粒を若干含むが密であり、色調は、内面は青灰色、外面は暗黒灰色で光沢のある自然釉をかぶる。焼成は良好である。底部はほぼ平らで、口縁には内傾する高さ1,1cmのかえりを有する。口唇部は丸みを帯び内傾しながら下る。調整は、外面底部は左回転の回転ヘラ削り、内面底部はナデ、他は回転ナデである。

２．35号墳の調査

表土は10cm程度と薄く、これを除去し精査を行った。その結果埋葬主体部の掘り方プランの一部と周溝を検出した。掘り方はトレンチ東端とＥ－３トレンチ西側から検出し、さらに西側1,5mで幅１mの周溝を検出した。墳丘を形成する盛土は流失しており、周溝との間隔から判断して規模は、径５～６mの小型の円墳であると推定される。

埋葬部の内部構造については未調査のため不明であるが、周溝内からは、くびれた形状のかなり使いこんだと測される砥石が１点出土した。

a 周溝内出土遺物

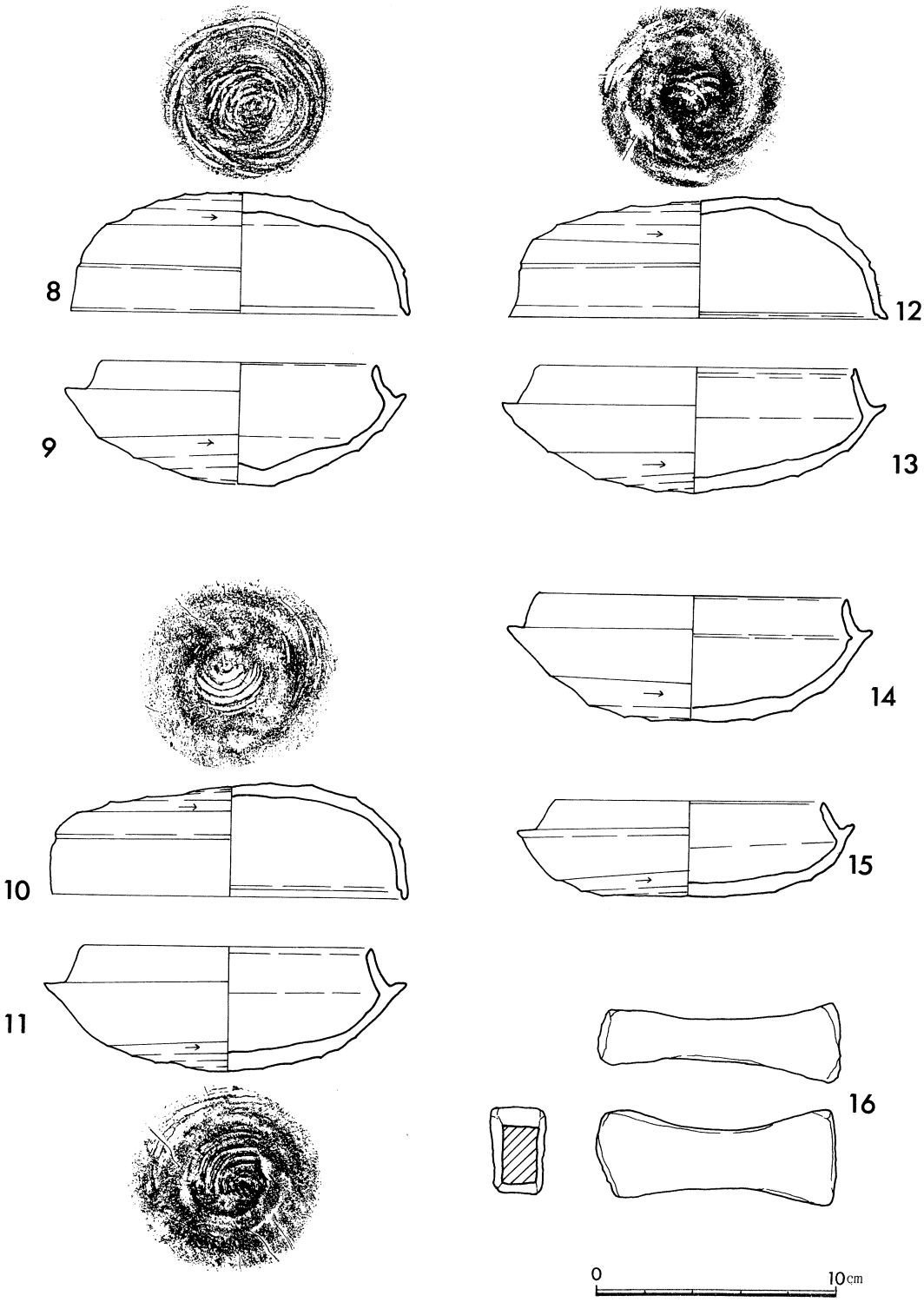
16は淡黄白色の砥石（第41図・図版48－16）で、長さ9,5cm,幅2,0cm～3,5cm,厚さ2,5cm～3,5cmを測る。各面とも凹み、使いこんだ形跡が残る。

３．36号墳の調査

表土を除去すると、トレンチ東側端の表土直下から一辺20～50cmの石材が露出した。試掘調査ということで石材の輪郭を検出した時点で調査を打ち切り、下部については精査を実施していない為内部構造については不明であるが、これらの石材はさらに南東側にも続く様相を示している。

土層の観察では、表土直下に石材が位置しており、墳丘を形成する盛土は流失したものと測され、さらに周溝も検出していないため、墳丘の規模・墳形は不明である。

トレンチ内からの遺物は何も出土していない。



第41図　山ノ内古墳群試掘調査箇所土層断面実測図

第Ⅵ章　まとめ

以上述べてきたように、今回の調査は７基の古墳について実施したが、調査で明らかになった事柄を列記してまとめとしたい。

調査区内の古墳は、規模、立地、形態の観点からして大きく４つに分類される。丘陵の最頂部に存在し、径10m、高さ1.4m、の今回調査の中では最大規模を有する12号墳。次に丘陵頂部の平坦面にほぼ直線状で等間隔に築造された30～32号墳の類。ほとんどが丘陵頂部に在るのに対し唯一丘陵北側斜面に築造された33号墳。そして、頂部ではあるが、標高は最も低く他の古墳から離れた場所に位置し、埋葬部を土壙墓とした29号墳である。

12号墳は、盗掘を受け遺存状態は良くないが、２つの主体部を有している事が判明した。

特に第１主体は石棺側壁が板状の石による３重の構造で、棺底には礫床もあり、他の古墳を卓越した技術を施されており、支群中で中心的な古墳であったと考えられる。

副葬品に鉄刀（刀子）を備えることなどから、被葬者は当時この地を支配した首長クラスの位にあったものと考えられる。

築造時期を窺う資料としては、主体部西側周溝から出土した須恵器の坏蓋・身がある。蓋には上面と側面との境にしっかりとした凹状の段があり、側面はほぼ垂直に下降し、口唇部は段を持つ。身は、かえりの部分が高く直立し、口唇部には段が有り、蓋身とも外面はケズリ仕上げの手法が見られるなど、特徴からして山本清氏の須[1]恵器編年Ⅰ期に属するものと思われる。

従って、これまでに調査された山ノ内14・28号墳（６世紀後半～７世紀前半）より、少なくともその造営時期は５世紀後半～６世紀前半まで溯ることが明らかになった。

30～32号墳は、12号墳の東側丘陵頂部６m間隔でほぼ直線状に点在する。

いずれも箱式石棺を埋葬主体とし、墳丘を形成する盛土は流出している。石棺の構造は、ほぼ矩形状の自然石を用い、頭位よりやや足位を狭め側壁で挟み込むようにこば立てに構築されているのが特徴である。盗掘を受け、蓋石・側壁を持ち去られたものもあるが、未盗掘の32号墳からも造営時期を窺う資料となる副葬品や遺物は何も出土しなかった。

33号墳は、構築状況などは概ね30～32号墳の様相と大きく変わるものではない。しかし、丘陵斜面に築造されている点で特異であると言える。丘陵頂部には33号墳を築造するほどの面積は十分残されており、なぜ無理に斜面から造らなければならなかったのかは疑問であるが、12号墳の裾に構築されている事実からすると両者の密接な関係も想定できよう。

29号墳は、調査地の丘陵西側端の標高の最も低い位置にあり、主体部は土壙墓で、上部から土師器片と須恵器坏身が出土した。須恵器の特徴は、前述した12号墳のものとはやや異なり、

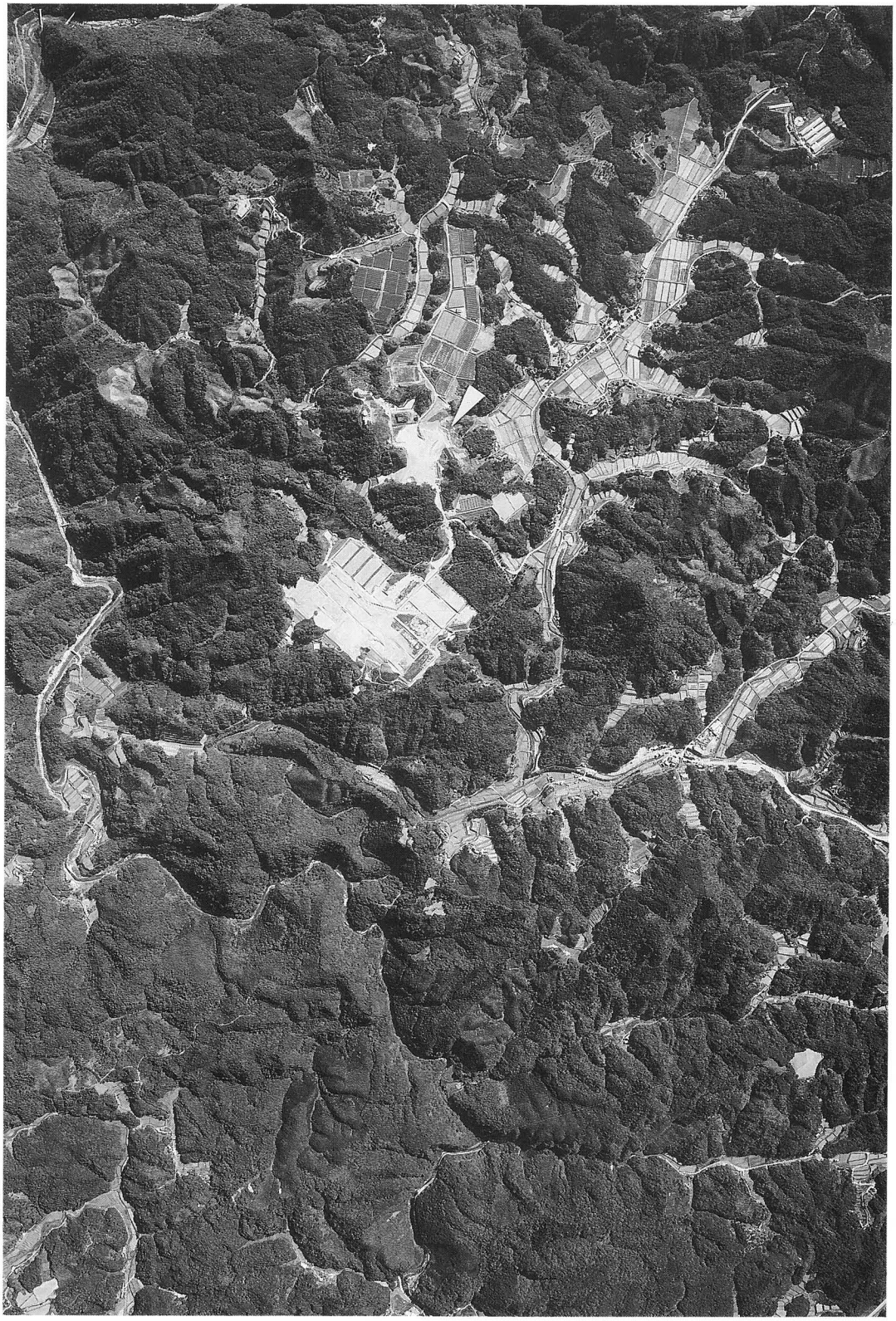
器形が大型で、かえりの長さも短く内傾する。しかし、口唇部は段を持ち、外面にはケズリ仕上げの古式要素が残っているため、山本清氏の須恵器編年[(2)]ではⅠ～Ⅱ期に移行する段階のものであると思われる。

山ノ内古墳群Ｂ群に属してはいるもののＣ群に近接している。支群のグループ分けについては試掘調査の結果でも明らかなように、未確認の古墳も存在する可能性が十分あり、今後の分布調査等により再検討が必要になろう。

註

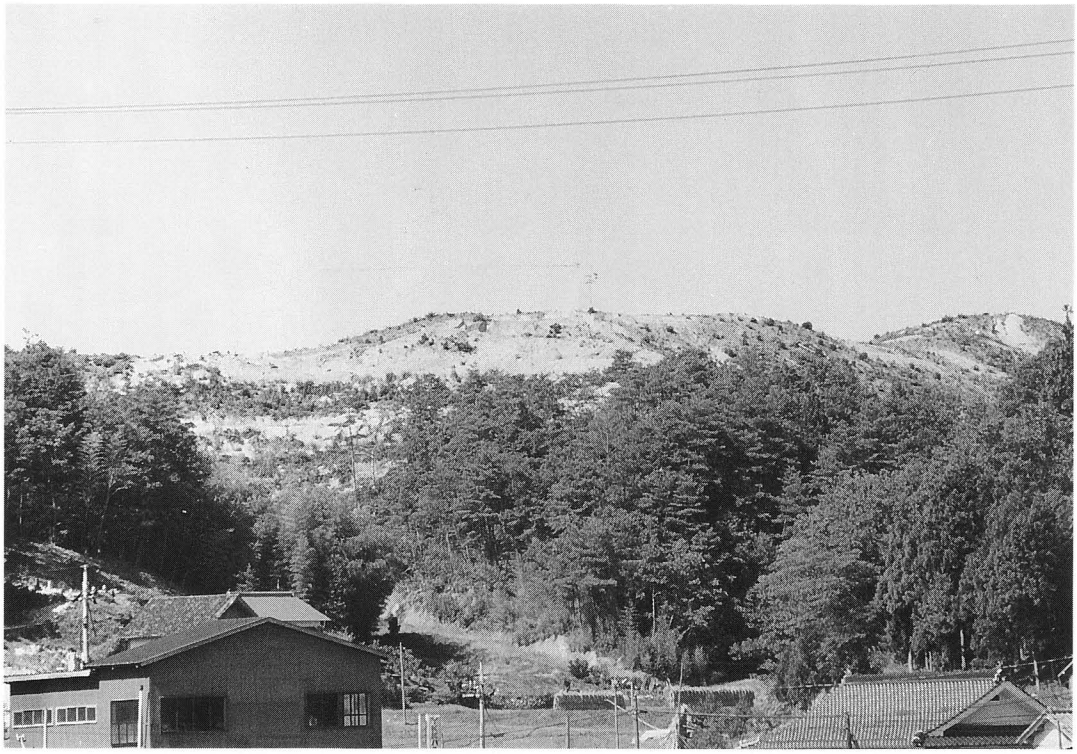
(1)、(2)山本　清「山陰の須恵器」『山陰古墳文化の研究』1971年

図版1



山ノ内古墳群の周辺地形の鳥瞰(空撮)

図版２



１．調査地遠景（南から）

２．調査地近景（東から）

図版３

調査地近景（南から）

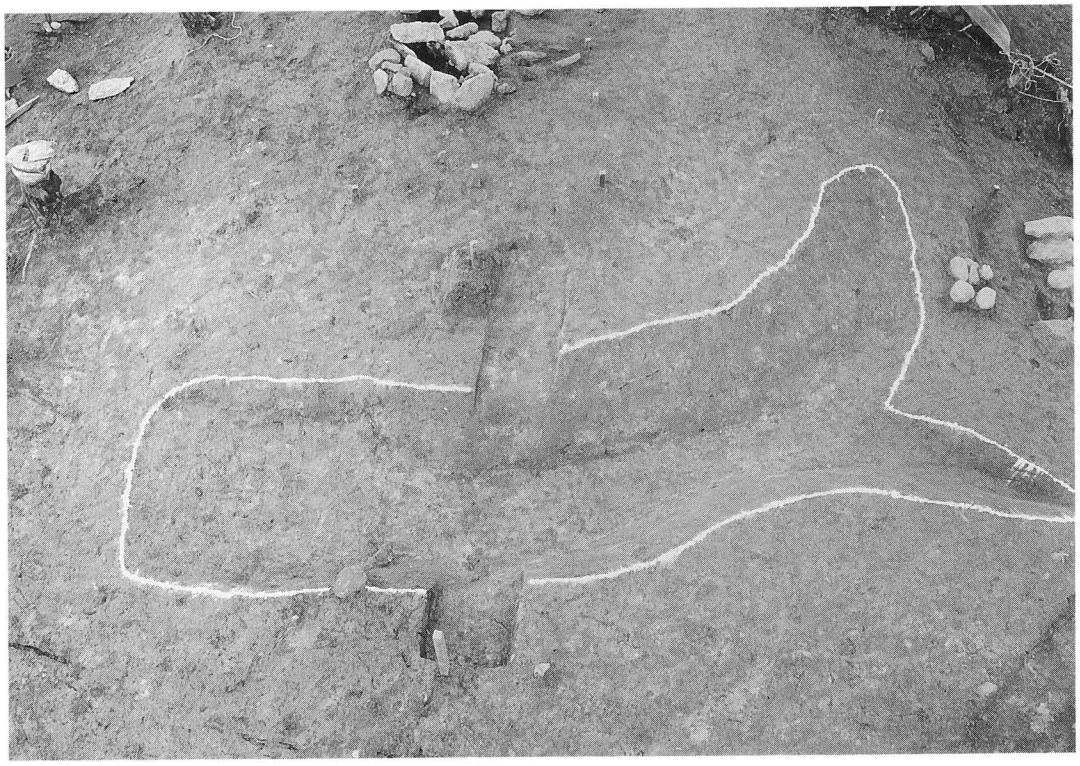
図版４

１．12号墳調査前の状況（東から）

２．同　表土除去後の状況（東から）

図版５

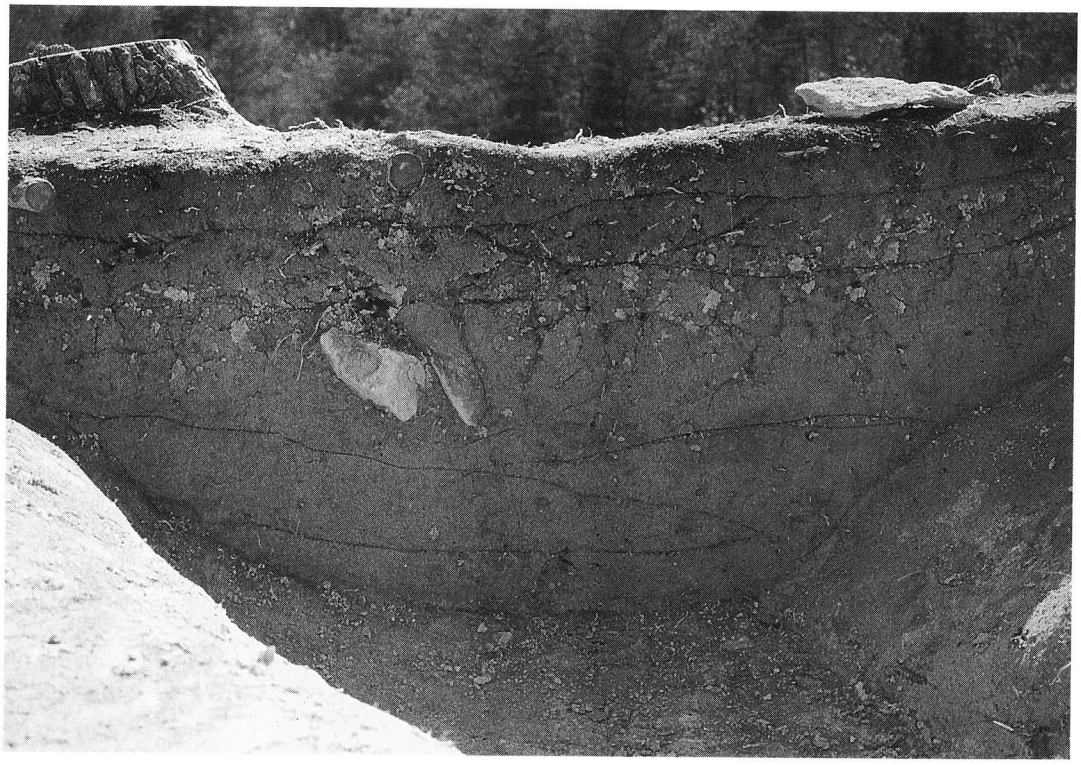
１．12号墳東側同溝プラン検出状況（東から）



２．同　完掘状況（東から）

図版６

１．12号墳墳丘東側土層（北から）



２．同　東側周構土層（北から）

図版７

１．12号墳西側周構プラン検出状況（南から）

２．同　周構内遺物出土状況（南から）

図版８

１．12号墳墳丘北側土層（西から）

２．同　西側土層（北から）

図版９

１．12号墳主体部検出作業状況

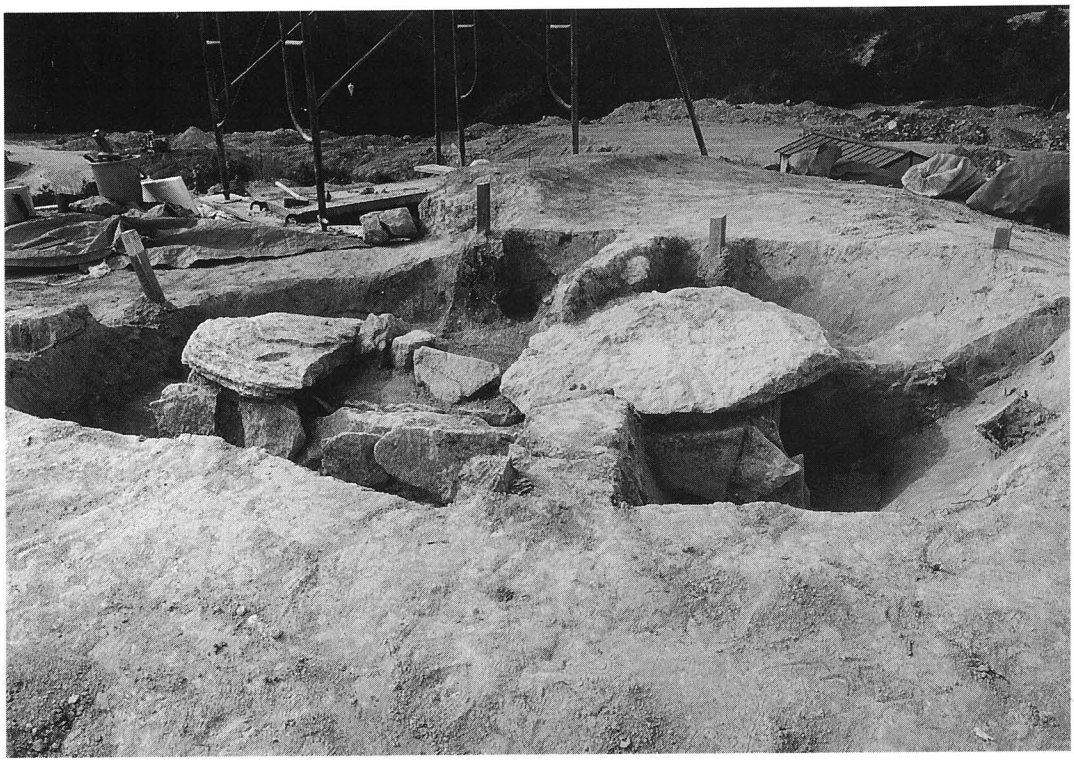
２．同　検出状況(東から)

図版10

1．12号墳第２主体(東から)

2．同　石材抜き取り後(東から)

図版11



1．12号墳第1主体検出状況(南から)

2．同　(北から)

図版12

1．12号墳第1主体(南から)

2．同　蓋石除去状況(北から)

図版13

1．12号墳第1主体（南から）

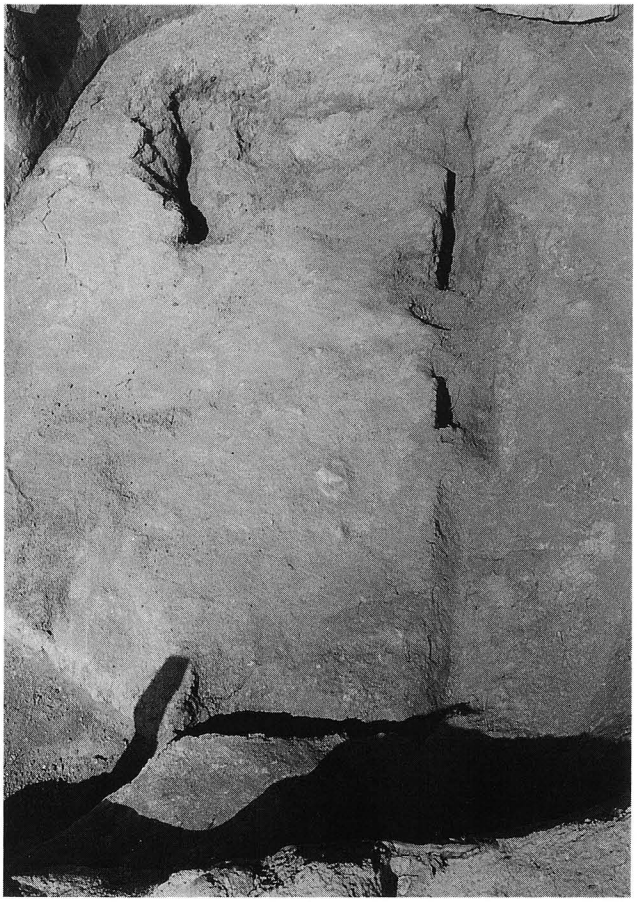
2．同　（北から）

図版14

1．床面(礫床)検出状況(上から)

2．副葬品(刀子)出土状況

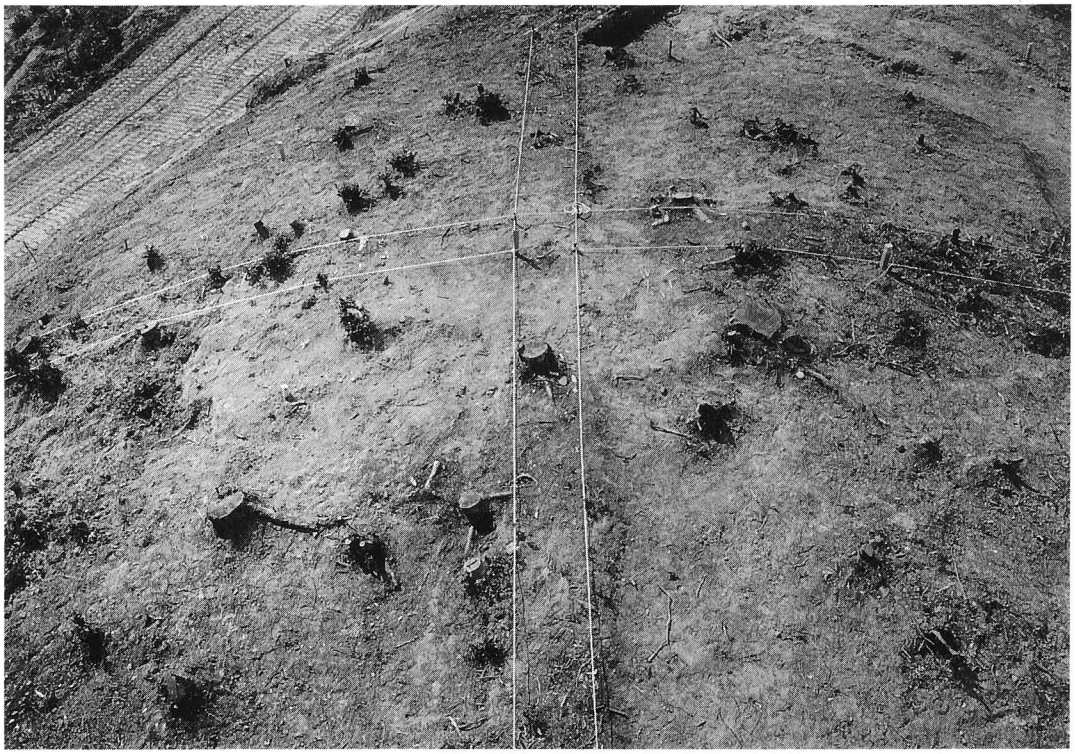
図版15



1．第1主体石材抜き取り後(西から)

2．盗掘跡検出状況(上から)

図版16



1．13号墳調査前の状況(東から)

2．同　調査後の状況(東から)

図版17

1．13号墳北側土層（西から）

2．同　西側土層（北から）